

やっぱり僕の異世界スクールライフは間違っている。

トウーラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、有るべき道筋から外れた物語。

目次

断界篇

第一話 無 | 1

黎明篇

第一話 船橋英一は状況を把握する | 10

第二話 船橋英一は総武高校へ入り、彼らに出会う | 17

第三話 船橋英一は教えを説く | 25

第四話 船橋英一は添削を行う | 36

第五話 血染めの庭球場 | 50

第六話 船橋英一は謎を解明しようとする | 70

第七話 惑いの慈悲 | 87

断界篇

第一話 無

人生とは人の数だけ存在し、その姿形も人によって変わる。

ある人の人生は良くも悪くも輝かしい人生で、またある人の人生は地味ながらも平凡で平和な人生で、またある人は巨万の富や名譽があつたにも関わらず一瞬にして無くなってしまった悲惨な人生だったり、貧困であつたにも関わらず一瞬にして富豪となった幸運な人生も存在する。

このように人生というのは善も悪も存在する。

しかもその善と悪ですら、環境、性格、思想、価値観といった様々な事象で何様にもなってしまう、故に全く同じようなものが存在しない、1つを示すはずなのに無限に存在する、それが人生と言うものだ。さてここである者の話をしよう。

この者は特に知力や体力が優れているというわけでも劣っているというわけでもなく、ましてや容姿も醜くはないが美しくもない、ただただ平凡な、どこにでもいる人間だった、

故に、この者の人生を漢字で表すのであれば、

「無」という漢字で表されるのであつた。

自分は普通な人間で、特に特別な能力や才能を持っていなくて、だからといってひどく周囲に劣っているわけでもない、また優越感もコ

ンプレックスもない、ドラ○エやテイ○ズで例えるなら勇者一行達に目もくれないようなそんな村人A、モブにしか過ぎなかった。

だからこそ自分の人生を一から紐解くならば、中身のないすつからかんで真っ白白透けな、そんな人生だと自分は思う。

ただ、最初からのうのうと生きてきたかというところでもなかった、子供が考えそうな「ヒーローになりたい」「野球選手、サッカー選手になりたい」「誰でも直せる医者になりたい」というような夢みたいなものは持っていたし、周りの皆だつてそういった存在を持っていた、そのためにキツそうなトレーニングを行ったり、何時間も勉強を行っていたりと皆それぞれその理想を叶えるために努力を行っていた、例え周囲から馬鹿にされ、侮蔑されようとも、僻まれようとも、努力をしていた。

……だが、自分の母親はその周囲に対してかなり懐疑的だった。

母親は決して毒親というわけでも、甘すぎるダメダメなバカ親というわけでもなく、きちんと現状を把握し、適切な行動を取り、安定した結果を残していった、決められた事はちゃんと行える頼りになる人材、悪く言えば仕事一筋でなんの面白味のないつまらない人だというのが、周りの評価だった。

そんな現実主義な母は自分に対しても鬼……というわけでもなく頑張ったりしたらちゃんと誉めてはくれたし、悪いことをしたら叱ったりとちゃんと母親をしていて、そんな母親は嫌いではなかった。

しかし、その母親から言われた言葉が、自分に理想を抱く事を疎むべきものと、忌むべきものと、認知させることになったのだ。

あれは、自分が小学生の頃七夕で短冊に願い事を書いているときだった、周りのみんなが『かっこいいやきゅうせんしゅになりたい』『かわいいアイドルになりたい』『パパとけっこんしたい』『そうりだいじんになりたい』『せかいせいふくをしたい』とか書いているなか、自

分は『かつこいいヒーローになりたい』と書いた、別にたいした願いではなかった、たまたま見た特撮ヒーロー番組を見て憧れたから、自分もあなりたいと思っけていてもおかしくはないだろう、だけど自分の母親はその事に対してこんな事をいったのだ。

『うん、なれるといいわねヒーローにだけどね、あれはここにはいない物なのよ、いくら願ったつてなれない物なの、それよりも、理想ばかり追いかけて迷惑をかける人にはならないで、周りの皆の役に立つようなそんな立派な人間になりなさい』

といったのだ、すぐに自分は『まわりのひとたちのやくにたつめいわくをかけないひとになりたい』と書き、短冊に吊るしたのであった。普通だったら子供を喜ばせるためにあえて肯定して生きていく上で大切な事を育ませる、それを自分の母親はしなかったというよりも否定こそしなかったが難色を示し、社会の役に立てるようにと静かに諭したのであった。

それからというものの、理想や幻想を抱くことに疑問を抱くようになっていた、たまに同級生から『どんな大人になりたいの?』と聞かれたことがあって自分は『なりたいたいのなんてないフツーに生きたい』と答えたら『・・・なんかつまんなくない?』と言われたが別に何にも思わなかった、むしろ(そんなもの抱いたつて何にもなんないだろ)と思っけていた。

ここまではあくまで疑問を抱く程度の物だったのだが、これが決定打となったのだ。

それは自分が高校生の頃だった、その時は周りのみんなは誰もが理想のために研鑽していた、特に野球部は『甲子園を目指して頑張ります!』と意気込みキツイ練習にも耐え忍びついに地区大会決勝まで上り詰め、周りから褒め称られ、称賛されたのであった。

あのニュースさえ流れなければ。

「決勝戦の相手に妨害工作を行っていたことが発覚、被害者は意識不明の重態に」

それからというもの、周りから非難の対象とされ、激しい誹謗中傷を食らったのであった、それだけならまだしも取り調べの結果下級生に拷問同然の指導を行っていたことがわかり、ますます拍車がかかり、最終的に廃部となった。

どうでもいいことだか関係者の監督とかは『俺は理想のために動い

てただけだ、俺は悪くねえ』と、叫んでいたそうだ。

これが原因で願ったら所で叶うわけでもないし傍迷惑になるだけなのだからという思いがこびりつくようになり、それからリスクは避けるようにする、博打じみた事はしない、真剣に取り組まないといった平穩ではあるが夢も理想もない人生となったのであった。

ただ………

「そこをなんとか！お願いします!!娘の養育費とか嵩む上に家族にまで!!」

自分には何も無い、特に優れているわけでも劣っているわけでもなく、特徴もない、人々は自分を「つまらない人間」と言うであろう、しかし目の前にいるやつよりはましだ。

「あなたは企画を打ち出したにも関わらずなんの業績も出せていません、これだけならまだしも無断欠勤および遅刻までしておまけに業務命令も無視している、ここまでしておいて上層部の方々があなたを継続雇用すると思いますか？」

こいつは叶えられもしない無謀な行動を行い、わが社に多大な損失を与えた、言うまでもなくこいつはただの足枷にすぎない。

だからこそ消すのだこいつを。

「待ってくれ!頼む!」

「お引き取りください」

ただ規則にしたがい動いてればちゃんとした実績も地位も労働対価も得られるにも関わらず無視して行動するとは、早速アホでしかないと思っていた時だった。

「死ねえ—————!!」

「!?」

自分は、首を切った奴に、刺されたのであった。

そして自分の意識はそこで途切れたのであった。

「おめでとうございます!!抽選に当たりました!!」
.....?

……だれ？

そこにはエリーゼ・ルタスの姿をした誰かが立っていた

「あなたはなんの罪も犯していない無垢な魂で、上層部から転生のチャンスが無償で行えるだけでなく特典まで与えられました！こんな幸運な事はありません!!」

……うるさいなあ……

「ちよつと！どこへ行くんですか?!いいんですか?!天国へ行っても!?!ずつと日向ぼっこしてるだけになってしまいますよ!?!」

……いや面倒だし、もう戻りたくないと言うか……
「じゃあ昔の事思い出して見てください、なにも思い出せないでしょう?それなら……」

……そりゃあ、まあ……

「なら大丈夫ですよ!!」

……じゃあ……行きます……所で君は?

「あ、私はあなたの世界で言う天使だと思ってください、私のことはエリと呼んでください」

そして、大きな土管のようなもののある部屋へとエリと一緒に向かった。

「あれが異世界への道です、あなたは

[[rb:船橋>ふなばし]] [[rb:英一 > えいいち]] という少年になるのです」

……ふなばし、えいいちって?

「うーんわからないんです」

……そうなんだ……

「さあ、なかに入ってください!」

.....いやいや、そんなこといわれても.....

「大丈夫ですよ! さあ!」

そして押されるがまま入ると。

!?

急に傾き、すごい早さで滑り落ちるのであった。

「.....」

「.....きなさい」

「.....」

「起きなさい、もう少しで着くぞ」
「!？」

誰かに呼ばれ、急に目を覚ますと。

(あれ? こいつは.....?)

大人とは思えないような手を見つめる、そして車を運転してる人
こう訪ねた。

「あのさ、いまどこ? 何時?」

「今は午後の五時半だ時だ、もう少しで千葉に着くぞ」

そして窓を見ていると、ディスプレイニアンドが見えた。

「.....」

「新居の方まで時間がもう少しかかるので父さんは寝てください」

「心配するな、大丈夫だ」

(そうか、この運転してる人は父さんで隣がおじいちゃんって訳か、おれ本当に転生したんだ)

こうして自分は船橋英一として生まれ変わったのだ。

先に言っておこう、これは比企谷八幡の間違った青春ラブコメではない、

船橋英一の物語だ。

黎明篇

第一話 船橋英一は状況を把握する

「でっけー……」

高速道路を抜けもう三十分ほど一般道路を車で揺られ、ようやく家に着いて、船橋はこう呟た。

目の前にあるのは若干年期の入った日本家屋で見るからに余程の富豪が住んでいそうな、そんな荘厳な雰囲気醸し出していた。しかし見た目だけではなく中もまた豪華な造りとなっていた。

「広すぎでしょ……」

間取りは、納屋を含めて10LDK、浴槽は1坪以上、中庭は10坪、しかもそこには道場のような館があり、そのなかには周りに似合わないランニングマシンといったトレーニングがたくさん置かれていた、それだけならまだしもなんと家政婦さんまで雇っているという。

これだけを見て自分の家はかなりの大金持ちだと思わない。

「信じられない、こんなことが……」

しかしそれでも英一の心の中は未知なる世界に一人で放り込まれた不安、あらゆる法則を無視して起きた事に対する驚愕、未だに霧のようにモヤモヤとした物が残っていた。

『異世界転生』。そんなものはゲームや漫画の世界だけのものだと思っていたのに今こうして、28歳だった頃の自分とは明らかに風貌が変わっている、さすがに認めざるを得ないだろう。

「……だとしてここはどんな世界なんだろう」

そうなのだ、あの時に会った天使、もといエリは船橋英一の事も送られる世界の事もなにも伝えてはいなかった、見る限りだと根本的には前世の頃となにも変わってはいなかった、まあ名前から自分の送られる世界はファンタジーな世界じゃないと思っただけだが、それでもまだ不安は残っていた、これがもしも言葉が伝わらなかつたり北〇の拳みたいなのだったらまず暮らしていくのは不可能だろう、真っ先に

飛び降りて死ぬ。

(あ、もう俺前世の事を放っちゃってるよ)

周りの事に気を取られ、すっかり前世の事はそっちのけになってしまっていた、まあ、何もなかったが、それでも簡単に捨てられる物ではなかったのだから。

厳しくて優しく、頼りになって鬱陶しかった母。

頼りなかったが憎めず、愛嬌のあった父。

多くの無能を刈り取って、発展途上の上にあった仕事。

様々な娯楽を通して、交流を深めていった友人達。

それなのに自分はそれらを簡単に記憶の彼方に追いやっている、そんな自分の薄情さ、諦めの早さに自嘲してしまう、まあそんなことやったって何にもならない、こうなった以上この世界で生きていくしかないか、と思っていた時だった。

「英一、こつちに来なさい」

父の呼び掛けに応じた自分はすぐに駆けつけた、すると門付近に父と祖父そして母とそのとなりにかわいい少女がいた。

「あれ？父さんとお爺ちゃんどこに行くの？」

「ああ、お前の学校の手続きと色々とな」

「あなた、ずっと運転しっぱなしだったんでしょ？大丈夫なの？」

「気にするな、テツはそんなやわじやない」

「お爺ちゃんには聞いてないよ」

そんなやり取りを聞いている中、自分はこれが自分の家族なのかと思っている、しかしこの前の事を考えていては顔にも現れ、心配させてしまうと出ないかとも思っていた。

家族、そう、家族だ。

自分の前の家族とは色々な意味で異なっていた。

まずは自分の父親、以前の父親とは違い鷹の様に目は鋭く、髪はまるでワックスをつけてるのかというくらい、ツンツンに立っていた、そして普通のサラリーマンとは少し細マッチョで、まるで若武者のような、そんなオーラを出していた。

そして名前は船橋ふなばし、徹清通称テツ、何でも由来は常に清らかで正し

くあれ、と言う願いを込めて付けられたのだそうだ。

隣にいるのは自分の母親、おおらかで穏やかな、そんな感じだった。外見はふくよかでもなく、痩せすぎでもない、標準な体型で以前の母のような威圧感はなかった。

名前は船橋ふなばし 菊江しきくえ

そして祖父の前には自分の妹、以前は一人っ子だったのて対して考えてていなかったが、こうして見ると結構かわいかった、妹を持つものならばこうなのであろうか？

髪は癖っ毛が目立ち、背が少し小さい、しかし活発そうな姿をしていた。

名前は船橋ふなばし 蓮華れんか

(こうしてみると本当に普通の家族とは結構上の人だな・・・色々) そんな風に思っていると。

「英一」

突然呼ばれて、ぎよっとする。

「!?何？」

すると、祖父はお金を出してきたのだ、その額はなんと15,000円。

「なにこの額!?!」

「そのお金で周りを見てきなさい、今日からここがお前のすむ場所になるのだから」

「あーっ!!ずるいよお爺ちゃん!私にもちよーだい!」

「蓮華これはただの小遣いじゃない、探索のための軍資金なんだ!

それに中学生のお前が持っていないものではない」

「ぶー」

と、荘厳な声で蓮華を叱る。

そうこの人が自分の祖父、船橋ふなばし 厳一げんいちろう 徹清の父親だ。

さつき隣に座っていて思っていた事は、こいつはヤバイ、何から今まで普通のお爺ちゃんじゃない、と言うか見た目からして普通じゃない、俺の知ってるお爺ちゃんとはかけ離れている、髪は白髪だが肌の色は褐色で腕を少し見えていたのだが鍛えられている、まるでラオウ、

じゃない霸王だ、伊達でも酔狂でもないそんな気をだしていたのだ。

「じゃあ私たちは帰りますので」

「お兄ちゃん元気でね」

「あれ？一緒に暮らさないの？」

「何いつてるの、お父さんと暮らすって言ってたじゃない」

「ああ、そうだった」

不味い不味い、となるべく心配させないように振る舞う、そういえば
ばと思ひ出す。

「父さん、僕の行く学校ってどこ？」

「忘れたのか？総武高校だ」

.....あ??

そう、ここは「やはり俺の青春ラブコメは間違っている」の世界だった。
た。

それから父と祖父が出発すると同時に自転車でサイクリングを
することになり、あっちこっちを見れ見たのだがどうやら前世とは対
して変わってはおらずほとんど同じだった、そしてセブナイレブンで
おでんと飲み物を買って休んでいると。

「やっと会えましたね」

「エリか」

あの天使、エリと再会したのであった。

「どうですか？異世界へ来た感想は？」

「……どうゆうこと？」

「どうかしましたか？」

「何で、よりによってこのラノベの世界なんだい？」

「？不服ですか？」

「いや、不服って言うか、さっき少しだけ思い出したんだけど

あれ、とんでもないものだぞ」

それは色々な意味で、とんでもない物だったのだ、「やはり俺の青春ラブコメは間違っている」通称「俺ガイル」、ガガガ文庫より出たライトノベルで、「このライトノベルがすごい」にも取り上げられたラノベだった、自分も見てみたのではあったが途中で飽きたのでソードアトオンラインの方に切り替えたのだった、そして何となくネットで調べてみた時だった。

名無しさん

俺ガイルクソタヒね断筆しろ

名無しさん

アホが浜マジうざい消えろ

名無しさん

あれだけ待たしといてこんなクソ内容とかマジ大草原
名無しさん

つーかあのイベント絶対あおいちゃんと早見さんに合いたい目的で原作どーでもいいんだろワロス

とまあこんな誹謗中傷が掲示板にあり、静かではあるが荒れていた、それだけならまだしも何年か経って最終巻が発売されたが、その内容はとんでも無い物だった。

それは、ある依頼を成功させるために、事故の一件と自殺する所を雪ノ下雪乃がYouTubeで公開して、自分達の家族の社会的地位を潰すと言うものだった。

最終的に炎上してしまい依頼は失敗、家族は両親は失踪、姉はバツシングに耐えきれずに飛び降り自殺、等の本人は死ななかつたものの精神病院送りとなりになり、残された部員達もギクシヤクして進級と同時に疎開に、

さらに廃校が決まってしまい、そして「やっぱり俺の青春ラブコメは間違っている」という台詞で締め括られると言うものだった。

この滅茶苦茶極まりないラストに読者は大激怒、インターネットでは大炎上し全巻ビリビリに引き裂いて道路にぶちまけるといった珍現象が起こるといった騒動に発展してしまった、その後日作者が部屋で亡くなっているのが発見されその近くにあった手紙には自分の書いた小説の恨み節が延々と綴られていた。

このせいでこの小説は「やばい最終回123」でも記載されないうほど早速語ることすら憚れる物となってしまうたのである。

「へー・・・そうなんですか」

すべてを聞いたエリは驚いていた、小説でそのような騒動が起こるなんてさすがに思わなかつたんだろう。

「あのさー今さらなんだけど他の世界にまた行けないの？こんなヤバイ世界でやって行けるか不安なんだけど・・・」

「大丈夫ですよ、住めば都って言いますしそれにラノベⅡ現実っていう事にはならないと思いますから」

「本当？」

「まあそれはあなた次第と言うことで頑張ってください、あ、また話をしたくなったら電話で読呼んでください、たまに一緒にあそべますので、それでは」

「あ、ちよつと!!」

という前にエリは消えてしまった。

「大丈夫かなあ……」

そんな彼の眩きは春風に乗って消えていくのであった。

第二話 船橋英一は総武高校へ入り、彼らに出会う

「ここが今日から僕の通う学校か……なんか……でかいし綺麗だなあ」

原作では少ししか語られていなかったがこの総武高校というのは進学校だけに結構でかい、自分の以前の学校もそれほど小さいわけではない物の、それでもと比べてみると敷地は広大だった。

「あつといけない、早く入らなきゃ」

一旦学校の事を考えるのを辞め、中に入るのだった。

「君が先日お父様とお祖父様の言っていた船橋英一君だね、私は平塚静、現国の教師だ、よろしくな」

「はいっ、よろしくお願いします……」

「緊張してるのか？まあ、そんなに畏まるな」

改めてみるとこの人本当にグラマスな体型してんだなあ、と考える。

これであるの男勝りで粗暴な態度等を直していたとするなら、男なんていくらでもよってくると思うのだから……

「船橋君？」

「!?なんでしよう？」

「今君なんか失礼極まりない事を思っていないかったか？」

「あ！いえいえ何も……」

あぶねー……と船橋は肝を冷やす、もしさつきまで思っていたことが先生に感づかれていたとしたら間違えなくグーパンをぶちこまれていただろう、というより何で解ったの？見聞色の覇気でも身に付けてんのかこの人？

「まあいい、教室へ案内しよう」

「あ、よろしくお願ひします」

「そう言えば、君はなにか部活動するのかね？」

と、行きなり言われると船橋は考える。

「うーん色々見て回って考えますがあつたら美術部ですかね」

「美術部？何でだ？」

「自分、絵描いたり、彫刻掘ったり色々やるのが好きですから」

「ふーむそうか……」

平塚は思い詰める。

「？なんですか？」

「いや、しないのであれば紹介したい部があるのだが……お、着いたぞ」

「ここは……!!」

自分のクラスの教室に着いて英一は驚いた、そこはFクラスだったのだ。

「ちよつと話をするから、待っていてくれ」

「はい」

と言つて、平塚は教室へ入っていくのだった。

(まいったなー……よりよつてこのクラスか……)

はあと船橋はため息を付く、自分は前世の方では最初と最後辺りしか見ていないのだがこのクラスは特に騒動が起きていた、特に最終回辺りじゃあのゴタゴタの影響で周りの人間関係がギスギスした環境になってしまい、何人かは引きこもるか、転校するかしてしまい、最終的には終業式までお通夜のようなムードになってしまった。

(こんなクラスで、やってけるかなあ……)

なんて思っていると。

「船橋くん、入りたまえ」

「！はい！」

平塚に呼ばれたため覚悟を決めて、入っていくのであった。

「先日もいったが、今日からこの学校に転校してきた船橋英一君だ、ほ

ら、みんなに挨拶」

「は、はい！じぶ、僕の名前は船橋英一です、ここ千葉には最近引越してばかりで、よくわからない所があります、その辺は……暖かい目で見逃してください、よろしくお願いします」

と、精一杯のアピールを行う、すると。

「うわーあの子ちよつとかっこよくない？」

「はは、暖かい目か、まあ引越してきたばかりだし見守ってやるか」「や、やばい、あの子行けるかも、隼人君とくつつければ……ぐふふふふ」

「姫奈、擬態しろし!!」

と、こんな反応が帰ってくる、……若干ヤバイのが紛れていたが。

「席だが……お、あそこ空いているな、そこに座りなさい」

と言われ、席へ向かい着席する。

それからは平塚が今後の予定など、色々な話を話しているとき、船橋は考え事をしていた。

(これが、物語の舞台となるF組か……)

由比ヶ浜結衣、主体性がなく軽率な行動と性格が目立つが善人な少女。

三浦優美子、このクラスのトップカーストに居座り、私の強い我が儘な性格だか面倒見がいいらしい人。

川崎沙希、人を寄せ付けない一匹狼な雰囲気だか、決して悪人ではなくねは優しい少女。

海老名姫奈、トップカーストのメンバーで、とにかく男と男がくつつく所を連想しまくる腐女子。

葉山隼人、成績優秀、スポーツ万能、イケメンと完璧なりア充でトップカーストの人間。

戸塚彩加、ああかわええペロペロしてえ、だけど男だ、神様ふざけんな、そう言うのはハンター×ハンターだけでいいんだよ、クラピカ

とアルカとナナチだけでいいんだよ、あ、ナナチはメイドインアビスか、ゲフンゲフン、いけないいけない、脱線しちゃった。

戸部 駆、チャラ男、苦手、以上。

大和と大塚、よくわからん、以上。

え？男の紹介が杜撰だつて？仕方ないじゃん、原作じゃこいつらの説明あんまりなかった訳だし。

そして船橋の隣にいるのは、この原作の主人公、比企谷八幡。

筋金入りのひねくれ者で態度も目も性根も腐っている、そんなやつだった。

(今日からこいつらの過ごし方していくとなると注意が必要だな……)
「それでは今日はここまで、明日から本格的に授業が始まるのでみんな準備するように」

と言つて、平塚は教室を出た。

「さてと」

自分も帰る準備をしていたのだから、

「ちよつといいー?」

「?」

三浦に声をかけられるのであった。

「あんたーここ来たばかりなんですよ?だったらあーし達が案内してあげよつか?」

船橋は考え込む。

「うーん悪いけど遠慮しておくよ、自分で見て回って分からなくなつたら案内してくれないかな?」

「えー?なにそれ?隼人ー?この子案内してあげようよー」

と、葉山を呼ぼうとするが。

「ゴメン優美子、俺たち部の方の準備しなくちゃいけないから今日は行けないや」

「えー?大和と大岡は?」

「悪い、俺も」

「ごめんなー」

と、急いで教室を出ていく。

「……じゃあなんかあったらお願いね」

と言って船橋は教室を出ていくのであった。

そして数日後。

「ふむ……美術部に入るのか」

「はい、見つかったので」

「そうか……」

平塚は思い更ける。

「?どうかなさいましたか?」

「あ、いや実はだな私はある部を立ち上げていてな、良ければ紹介したかったんだが……」

「なんの部なんですか?」

「……話すより実際に見てみると良いだろう着いてきたまえ」

そして着いていく最中、平塚と会話していた。

「名前は奉仕部と言ってな、まあ、言ってしまえば困っている人の手助けをする部だと想ってくれればいい」

「なるほど、でも自分は美術部に入るつもりなのですが」

「いや、入部してくれとは言っていない、ただ興味があるのならヘルプ要員として来てくれればいい、もちろん美術部の方の活動もすればいいからな」

そして、ある部屋についた。

「着いたぞ」

そして扉を開け、入っていった。

すると、中には同じクラスの比企谷とロングヘアの少女がいた。

「先生、入るときはノックを、とお願ひしていたはずですが」

「ノックをしても君は返事をした試しがないじゃないか」

「返事をする間もなく、先生が入ってくるんですよ」

先生の言葉に、彼女は不満げな視線を送る。

「それで、その後ろにいる男は？また依頼のひとですか？」

「いや、こいつは依頼者じゃない、ちよつと紹介したくてな、ほら挨拶」と言われ、船橋は挨拶をする。

「初めまして、船橋英一ですよろしくお願いします」

「船橋君は先日引越してきたばかりでまだわからない事があるんだ、雪ノ下、比企谷、ここの案内をしなさい」

「……分かりました」

「うーす」

と言い、前に出る。

「ようこそ船橋英一君私は雪ノ下雪乃、ここ奉仕部の部長よ、歓迎するわ」

「……比企谷八幡、一応ここの部員だ」

と、簡潔に紹介をした。

「言っておくが彼はここに入部はしない、あくまで興味があったら自主性で参加をする、つまりはヘルプ要員だと思ってくれればいい、じゃあ私は戻るから話をしたら美術室に向かってくれ」

「はい、分かりました」

と言い残し、平塚は去っていった。

「いつまでそこに突っ立っているのかしら」

「あ、うん今座るよ」

と、すぐに椅子を用意し座るのであった。

「それで、この奉仕部の事なのだけけれど」

「困ってる人の手助けをする部、だっけ？」

「そうよ、NPO法人みたく炊き出しを行う、というように手助けをして社会の円滑化を図る、そんな部よ」

「そうなんだ、じゃあ……比企谷君も？」

「いや、おれは「違うわ、この人は平塚先生に更正するようお願いされた哀れな人間よ」……」

「……そうなんだ」

と、一刀両断する、原作でもうざかったが実際に見てみると結構うざいものだった。

「所で、あなたには困ったことはないの？」

「いや、今はないよ」

「そう、何かあつたら私に言つてちょうだい、この男は宛になら無いから」

「宛になら無い云々以前に俺は無理やり入れられた訳なんだか」

「それはあなたのくさった性根が原因でしょう？そんな精神している人間ができると思う？」

と、冷戦じみた言い合いが行われる、はっきり言おう、とんでもなく腹にキリキリする。

「あのー・・・もういいかな？」

「あらごめんなさい、この下卑た男の話になつてしまつたわ、」

「友人の事を聞いたときに「どこからが友人なのかしら」とか言うやつも大概だと思うぞ」

また言い争いになる、もうやめてほしい。

「ちよつといいかしら」

「？」

「あなた、友達とかいるの？」

「うーんここにはいないかな、引越してきたばかりだから」

「そうなの」

「それがどうかしたの？」

「・・・分らないかもしれないけど、私にはそう言うのはいなかったわ」

「どうゆうこと？」

「私の周りほろくでもない奴ばかりだった。弱くて、心が醜くて、すぐに嫉妬し蹴落とそうとする。個人では敵わないからと徒党を組み、弱いくせに自分たちは強いと勘違いしている愚かな人たち。私は正しくあろうとしただけ。優秀でいようと努力をただけ。本当にそれだけだった、少なくとも何回も上履きを隠されたり、チョツカイかかれたりされたわ、だから変えるの、人を、世界を変えるの」

と、雪ノ下は宣言する、そして船橋は。

「……ずいぶん、無謀な目標だね」

と、ツツコミをいれた。

「あら、どう言うことかしら」

「いや、人と世界を変えるって言うけど、どうやってやるの?」

「それは、私が迷える人々の道標になって、導くことによつて……」
「迷つてるとかい言うけどその迷いつてのは人それぞれでしょ? いちいち聞いて回つてたとしたら、たった一人じゃ到底出来るものじゃないと思うけど」

「それは、賛同してくれる人を作れば」

「人の中身を無理やり変えようとする人に着いていくと人とかいるのかな?」

「……」

すると、雪ノ下はまるで親の仇を見るかのように睨み付けていた。

「ああごめん言い過ぎた、じゃあ僕美術部の方に行くから」

と言い、そそくさと去るのであった。

「……」

彼が去つたあと、雪ノ下は考え込んでいた。

(私が、あんなことになるなんて)

船橋英一、つい最近転校してきた人、一見すると弱々しい優男だった、だけど彼の発言は自分の目標の問題点を的確についでいて、彼と会話していると自分の掲げている目標がいかに無謀なものであるか思い知らされた。

「……い、雪ノ下」

「!?何かしら?」

「いや、お前ぼーつとしてたから」

「……あなたに心配される筋合いはないわ」

と、気を引き締め直すのだった。

第三話 船橋英一は教えを説く

デッサン、それは鉛筆と専用の紙、もしくはキャンパスを使う画法である。

一見すると、それだけで素晴らしい作品なんかできるわけ無いだろう、と思っただら間違いである。

その画法は至ってシンプルで白と黒だけのモノクロの標本を鉛筆で描く、油絵や切り絵、コンピューターグラフィックといった目立つ物ではない、しかしだからこそ緻密な観察眼と精密な動作が求められるのだ。

基本的にデッサンは何本も線を描き、そのあとで消ゴムで不要な部分を消していく、その後で鉛筆を水平に持つて、影を描いていって、同じようにまた不要な部分を消していく、これを何回も繰り返していつて、作品を書き上げるのだが、ここで作品の甲乙が決まってしまふ。

力をいれて描いてしまうと、消したとしても消しきれず、全体的に黒っぽい作品が出来上がってしまう、だからといって力を入れなくて描くとちゃんとした線が描かれず、全体的にぐにやぐにやとしたそんな作品が出来上がってしまう。

ではどうすれば良いのか？ 答えは、強弱を使いこなす事である。

大体の構図を作りたい時や薄暗い絵を描きたい時には、軽く、優しく、緩やかに鉛筆を振る、構図をはっきりさせたい時や明確な影を描きたい時には力を入れて描く。

そしてどの部分を明るく、暗く、どのような線を描いていくかを本人の観察眼で見極めていく。

このようにしてデッサンが行われていき、最終的に作品は出来上がるのだ。

こうしてみると、デッサンとは人生である。

時に激しく、時に緩やかに、線を描き自分が見て表したい思いをキャンパスに描く、この一つ一つの線が作品を作るための過程となっていくのであ「ちよつとー船橋くん？」

「?はい、なんでしよう?」

「ああ、誰かが君を呼んでいるみたいなんだ、ほら」

「?あ、雪ノ下さん」

「全く、さつきから呼んでいるのになんで気づかないのかしら、耳鼻科に行ったらいいわよ」

「ごめんごめん、絵描くのに集中してて、所でなんか用?」

「依頼が来たから呼びに来たのよ」

「なるほど、どんな依頼?」

「クツキーを作るのを手伝ってほしいらしいの、あなたも参加する?」

「.....」

(確かここは由比ヶ浜のあれに付き合わされるんだよな)

船橋は考え込む、そして。

(好き放題やってやる)

「うんわかった、参加するよ」

「それじゃあ部室に来なさい」

と、言われると船橋は片付けを行い、部室を後にするのであった。

そして部室に入ると、見覚えのある顔が写った。

「あ!ふなっしー!!君もこの部員なの!」

「ふ、ふなっしー?いや、船橋なんだけど.....そういえば、同じク

ラスの.....」

「あ!まだ紹介してなかったね!私は由比ヶ浜結衣!よろしくね!」

「あ、うんよろしく」

握手をした後、ふたりは着席する。

「それで由比ヶ浜さん、用件の確認をしたいのだけれど」

「あ、うん、さつき言ってたけど手作りクツキーを食べて欲しい人がいるの。でも、自信がないから手伝って欲しいんだ」

「いや、それなら何で俺らに相談したんだよ、友達とかに頼めばいいだろ?」

「う.....、そ、それはその.....、あんまり知られたくないし、こういうことしてるの知られたらたぶん馬鹿にされるし.....。こういうマジっぽい雰囲気、友達とは合わない、から」

由比ヶ浜は視線を泳がしながら答えた。

「ふーん。ま、いいけどさ。とりあえず俺たちはクッキー作るのを手助けすればいいんだろ？」

「ええ。私は今から家庭科室の使用許可をもらってくるから、あなたたちは先に向かつてちょうだい」

「うんわかった」

と返事を返すと、急いでスマホをいじる。

(あいつ料理できないとか言ってたけど、もしかしたら……ちよつと保険打つとくか)

家庭科室はバニラエッセンスの甘い匂いに包まれていた。

雪ノ下は手慣れた様子で冷蔵庫を開けて、卵やら牛乳やらを持ってくる。他にも秤やらボウルやらを取り出し、かちやかちやと準備を始めた。

(やつぱり雪ノ下は料理できるのか、あれ、ちよつと待て、自分はどうなんだ?)

ヤバいと船橋は思う、実は前世の方では料理なんて言うのは家庭科の授業以外でほとんどやっていない。

何でかと言うとそもそも食事なんて物は某魔術師殺しの如く単なる栄養補給で、短時間で済ませるか、仕事中にを済ませるものだと考えていたからだ。

従ってより美味しい物を、より綺麗な物を作ろう以前に料理なんて物は時間の無駄と割りきってしまった、「片手が空いて仕事ができるから」という理由で食べるものはハンバーガー、野菜スティック、サンドイッチとおにぎり(コンビニの)たまにカロリーメイトだけで済ませてしまう、という有り様だった。

ちなみに飲酒は少量嗜むが、タバコは一切吸っていないため、癌などはほとんどなかった……たまに栄養不足と医者に言われたが。

「曲がってるわ。あなた、エプロンもまともに着られないの?」

「ごめん、ありがと……エプロンくらい着れるよっ!」

「そこ、結べていないじゃない。……はあ、結んであげるからじつとしてなさい」

「あ、ありがと。．．．．．なんか．．．．．雪ノ下さん、お姉ちゃんみたいだね」

「私の妹がこんなに出来が悪いわけがないけどね」

と、いうやり取りを見てはっ、と船橋は思い出す。

(あ、そういえば母さんから少しだけど料理教わっていたっけ)

どうやら船橋英一は、母親から簡易的な料理の仕方を教わっていたらしい。

「あ、あのさ、ヒツキー」

「なんだ？」

「か、家庭的な女の子ってどう思う？」

「いや、なんで俺に聞くの？知らねーよ」

「そ、そっか．．．．．」

それを聞いた由比ヶ浜はどこか残念そうな表情をする、しかし元の笑顔に戻った。

「じゃあさ、ふなっしーはどう思うかな？」

すると、今度は船橋に意見を求める。

「うーんどうだろうね？今じゃ男性でも家事をやったり、女性だけど落ち着いたら仕事に復帰するって言うケースもあるし」

「へー．．．．．そうなんだ」

「あら珍しいのね、男がそんなことを言うなんて」

「ま、まあね、たまに料理とかするし」

「よーしっ！やるぞー」

と、由比ヶ浜は意気込み、料理に取り掛かるのだった。

早速初めてから数分後、船橋らはとんでもないものを目にするのであった。

「．．．．．なんだよこれ」

「一体どうゆうミスをしたらこうなるのかしら．．．．．」

「いくらなんでも．．．．．酷すぎるな」

「うう．．．．．」

自分たち、もとい由比ヶ浜はクッキーを作っていたはずだった、しかし目の前にあるのは真っ黒黒すけなクッキーとは呼び難きなにか

であった。

まあ、その過程を見ていればこうなっても可笑しくは無いと思うが。

その過程と言うのは卵を割るときに軽く当てるところか力一杯ぶつけ、ちゃんと混ぜなかったため小麦粉はダメが残ってたにも関わらずスルーして、バターは固形状のまま入れて、砂糖と塩を間違えて、バニラエッセンスや牛乳の量をちゃんと量らず突っ込んだりしてちゃんと出来るのが可笑的だろう……。合体事故が起こらない限り。

そして肝心の味の方も……

「……うん、炭の味だ」

しみじみと船橋は感想を述べ。

「うう〜……苦いし不味い〜」

由比ヶ浜は涙ながら自分のクッキーを食べていく。

すると、雪ノ下がすぐさまティーカップを渡した。

「なるべく噛まずに流し込んだほうがいいわ。舌に触れないように気を付けて。劇薬みたいなものだから」

さらりとひどいことを言う雪ノ下だった。

「こほこぽと沸いたケトルからお湯を注ぎ、雪ノ下が紅茶を淹れてくれた。

「さて、じゃあどうすればより良くなるか考えましょう」

「由比ヶ浜が二度と料理しない」

「全否定された!?!」

「比企谷くん、それは最後の解決方法よ」

「いや、そんな見も蓋もないこと言っちゃダメだよ、確かに由比ヶ浜さんののは度し難くて食べる方はもう憤慨物だけどき」

「ふなっしー!? そっちの方が言っちゃダメだからね!?!」

驚愕とツツコミの後に落胆する由比ヶ浜。がつくりと肩を落とし、て深いため息をつく。

「やっぱりあたし料理に向いていないのかな……。才能ってゆーの? そういうのなし」

それを聞いて雪ノ下がふうつと短いため息をついた。

「……なるほど。解決方法がわかったわ」

「どうすんだ？」

尋ねてみると、雪ノ下は平然と答えた。

「努力あるのみ」

「……間違ってはいないが」

「まあ、確かにそうだけど……」

努力は確かに解決方法かもしれないが、由比ヶ浜の料理の腕前を考えると、そんな生易しいものだとは思えなかった。

「由比ヶ浜さん。あなたさつき才能がないって言ったわね？」

「え。あ、うん」

「その認識を改めなさい。最低限の努力もしない人間には才能がある人を羨む資格はないわ。努力できない人間は成功者が積み上げた努力を想像できないから成功しないのよ」

雪ノ下の言葉は辛辣だった。だが、どこまでも正しい、ただ……言い方が言い方だけにどうしても受け取り難いものがあった。

「で、でもさ、こういうの最近みんなやんないって言うし。……やっぱりこういうの合ってないんだよ、きつと」

へへつと由比ヶ浜のはにかみ笑いが消えそうになったとき、カタツとカップが置かれる音がした。

それはとても物静かで小さな音でしかないのに、透き通った氷のような音色だった。有無を言わず音の主の方へと視線が引き寄せられる。そこには冴え冴えとした伶俐な雰囲気を放つ雪ノ下がいる。

「その周囲に合わせようとするのやめてくれるかしら。ひどく不愉快だわ。自分の不器用さ、無様さ、愚かしさの遠因を他人に求めるなんて恥ずかしくないの？」

雪ノ下の語調は強かった。

「まあまあ雪ノ下さん、無様とか恥とかはともかく、僕も確かに雪ノ下さんには同意だね。自分で考えて止めるかかやり続けるか決めるのならともかく、誰かの言われている事を鵜呑んで自分の考えを押し殺すのはどうかと思うね」

すかさず船橋は伝わりやすいように訂正する。

確かに正しいことを口にするには悪いことではない、ただそれを受け取ってくれるかどうかは別の問題なのである。

いくら正論を言ったとしてもそれとそれを相手が聞こうとしなければ意思も何も伝わらない、すべて徒労と無駄になってしまうのである。

前世であればどうしても聞こうとしない無能な輩に対して、上司の意思を伝えて退職届を無理にでも書かせるか、辞めさせない場合窓際部署に移動を命じるかをとるのが……流石に学校でそんな行動はとることはできない。

「か……」

帰る、とでも言うのだろうか。今にも泣き出しそうなか細い声が漏れた。

「かつこいい……」

「「え？」」

船橋と比企谷と雪ノ下の声が重なった。思わず三人して顔を見合わせてしまう。

「建前とか全然言わないんだ……。なんていうか、そういうのかっこいい……」

由比ヶ浜が熱っぽい表情で雪ノ下をじつと見つめる。当の雪ノ下はといえば強張った表情で二歩ほど後ろに下がっていた。

「な、何を言っているのかしらこの子……。話聞いてた？私、これでも結構きついことを言ったつもりだったのだけれど」

「ううん！そんなことない！あ、いや確かに言葉はひどかったし、ぶつちやけ軽く引いたけど……。でも、本音って感じがするの」「……あんならよかった、あれが原因でへそ曲げたりして匙を投げたりしたらどうしようかと思ったけど」

「そんなこと無いよ!!ふなっしーもちやんと自分を優先して行動できるんだから！よくわからないけど、ふなっしーもかつこいいよ!!」

突拍子もない礼賛に船橋は戸惑う。

「それじゃあさ、聞きたいことがあるんだけど言いかな？」

「あ、うん！いいよ!!」

「由比ヶ浜さん、クッキーのレシピって知ってる?」

「ううん、ぜんぜん」

由比ヶ浜以外の三人はずっこけた。

「……お前、レシピも録に知らないのにどうやって料理してたんだ?」

「えーっとね、大体見よう見まねであとは何となくで」

由比ヶ浜以外の三人はまたずっこけた。

「由比ヶ浜さん、あなたって人は……」

「?どうしたの?」

「……雪ノ下さん、これ努力以前の問題だね……」

「……そうね」

二人は頭を抱える、つまり由比ヶ浜はレシピを無視して自分勝手に進めていた、それでは出来るものも出来なくて当然である。

「……それじゃあ由比ヶ浜さん、今度はレシピを見てきちんと作ろうか、それでちゃんと作れるようになったらちよこちよアレンジを加えていこう、それで納得いくまで作りまくろう」

「え、できるかなあ……」

「よし、じゃあいい事を教えてあげよう、上手くなりたいのであれば他者の動きをひたすら模倣、つまり真似をするんだ、そこからいいところを吸収して、その動きを忘れないように呪文のように唱えて体で覚えるんだ、いいね」

「……うん! わかった!!」

と、喜んだ様子で再開するのだった。

「

それから、彼らは取り掛かるのだった。

「さっきのは甘味が少なかったらもうちよい砂糖を入れてさっきのは甘味が少なかったらもうちよい砂糖を入れてさっきのは甘味が少なかったらもうちよい砂糖を入れてさっきのは甘味が少なかったらもうちよい砂糖を入れて……焼き加減のはさっきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて焼き加減のはさっきは焼きすぎたから時間は早めに挙

げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて………」

「さつきのは甘味が少なかつたらもうちよい砂糖を入れてさつきのは甘味が少なかつたらもうちよい砂糖を入れてさつきのは甘味が少なかつたらもうちよい砂糖を入れてさつきのは甘味が少なかつたらもうちよい砂糖を入れて………」
は早めに挙げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて焼き加減のはさつきは焼きすぎたから時間は早めに挙げて………」

と、船橋と由比ヶ浜は呪文を唱えながらクッキーを作っていた。

「………何か不気味だな」

「………」

その最中、雪ノ下は船橋のことを見つめていた。

若干の不快な気持ちを出しながら。

そして数時間後。

「うんうんーこれは結構美味しいよ!!」

「まあ……いけんじゃねーの?」

「ありがとー!!」

約100個のクッキーを作り続け、最初のものとは比べ物にならないくらいのクッキーを作り上げたのであった。

「でも、このたくさんのクッキーどうしよう?」

「友達にあげたら?」

「いやさつき言ったじゃん、友達に言ったら・・・」

「趣味で料理してただけど作りすぎちゃった、余っちゃったやつ食べない？」って言えばいいと思うよ」

「あそつか！そうすればいいのか！それじゃ「待ちなさい」!？」

突然の雪ノ下の発言にみんなは驚く。

「こんなのじゃダメよ、もっと頑張ればより良い物になるのに」

「え？これでもいいんじゃないかな？」

「そ、そうだよ!!すごく美味しいよ!!」

「船橋君は黙ってなさい、確かに美味しいけどこれは完璧とは言えないわ、そのためには」

「おい雪ノ下、依頼から脱線してないか？」

「・・・どうゆうことかしら？」

「いや、由比ヶ浜の依頼は手作りクッキーを食べて欲しい人がいるけど、自信がないから手伝って欲しいんだろ？完璧なクッキーを作るのとじゃないだろ？」

「それに、結構デキのいいのができただけでなく交友のための物も出来たわけだし、上々じゃないのかな？」

雪ノ下は黙ってしまう。

「・・・あ、ありがとう!!おかげでいいのが出来たよ！早速明日友達にもあげてくるね！それじゃ!!」

場の空気を察したのか、お礼を言いつつそそくさと去っていくのであった。

「じゃ、僕も帰るから」

「といい、家庭科室から去っていく。」

「雪ノ下？」

そのときだった。

「ちよつといいかしら」

少し怒りぎみな様子で、雪ノ下がはなしかけてきた。

「何？」

「さっきの事なのだけれど、どうしてあのような事をしたの」

「あのような事って？」

「やっている事を真似させて、しかも完璧でないのに途中で切り上げるだなんて」

「どこがいけないの？」

「自分自身の力でやらなくちゃ意味がないじゃない」

「録に知らない人が自分だけできるの？さっきだって自分勝手に進めていたからあんなっちゃったんじゃないか」

「そ……それは、その……剃れでもだからといって諦めるのはどうかと思うわ」

「……雪ノ下さん、君のクッキーを百人に食べさせたとしていい答えが返ってくると思う？」

「何をいつてるの、決まってるじゃないちゃ「難しいかもね」どうゆうこと？」

今度はさらにどすを効かせた口調で、睨み付けてくる

「人によって好みや味覚ってのは違うんだよ、甘党な人はそう返ってくるかもしれないけどそうでない人はイマイチって言うかもしれないし、だから必ずしも百パーセント美味しいって来ることはあり得ないんだよ？」

「けど、それでも私のは」

「……これは僕の感想なんだけど、雪ノ下さんのは甘味が少ない上に固くて食べづらいと思うよ？」

と、言われて雪ノ下は目開く。

「あ、まあ気にしないでね！それじゃ!!」

第四話 船橋英一は添削を行う

「え!?家政婦さん休み!」

それは、突然の報せだった。

「ああ、何でも葬式の方に行かなくちやいけないので今日と明日は来れないとの事だ」

いつも来ている家政婦が忌引き出来れなくなってしまったのだ。

「じゃあ、ご飯どうするの?」

「俺は外で済ませる、英一も後でお金を返すからコンビニで済ませるなりしてくれ」

「うんわかった」

電話を切ると、船橋は考え込む。

「うーん晩飯は……牛丼でいいか、あとは明日の朝飯はともかく、昼飯はは……そうだ!」

閃いた船橋は早速、スーパーへ赴くことにした。

「……よし」

食材を並べ、確認する。

先ほど買ってきたものは、麻婆豆腐の元(激辛)、豆板醤と甜麵醬(30g)、にんにく、生姜、ネギ、挽き肉、冷凍シーフードセット(中身は海老、烏賊、ホタテ)これで何をするのかというと、明日の昼御飯を作るのだ。

ちなみにメニューは麻婆豆腐、なんでこれを作るのかというと、メニューを決めるためスマホを見ていた時、こんな事が記載されていたのだ。

「プロテスタン系神父も大絶賛!中華料理店「師殲」の激辛麻婆豆腐!!」

と、いう広告を見て麻婆豆腐を作ろうと考えたのだ、ちなみに麻婆豆腐なのになんでシーフードセットが入ってんだ？というと、（入れたら旨くなるんじゃないかね？）と、いう考えから買ってきたのだ……：まあそれだと麻婆豆腐じゃなくなるけど。

「よしーやるか!!」

早速、取り掛かるのだった。

そして、数十分後。

「よし………できた」

ようやく完成したのだった。

「あ、もうこんな時間！寝なきや」

「すぐさま自分部屋に行き、眠りにつくのであった。」

これが、後でとんでもない事になる原因になるとは知らずに。

「

そして次の日。

四時間目終了のチャイムがなると同時に生徒たちは昼御飯のために慌ただしく動いていた。

そんな中でも一際目立っていた集団がいた、葉山隼人達の集団である。

葉山隼人、サッカー部のエースで時期部長候補、しかも成績優秀。そして隣にいる金髪ロールで制服を着崩しているのが三浦優美子、二人とも容姿が整っていて美男美女という組み合わせ、見ていて絵になっている、と思う。

そしてその二人にの周囲にいるのは彼らのメンバーであろう人達で、その中に由比ヶ浜結衣もいた。

「ねえー隼人おー。今日は雨降ってるし、部活なしであーしらと遊びに行かない？今日はサーティワンでダブルが安いんだよ。あーしチョコとシヨコラのダブルが食べたい」

「おいおい、どっちもチョコじゃないか」

「ええー。ぜんぜんちがうし。ていうか超お腹減ったし」

「悪いけど、今日はパスな」

葉山がそう言うのと三浦がきよとんとした表情になる。

「今年俺ら国立目指してるからさ、そっちに力入れたいんだ

と、葉山がさわやかな笑顔で言う。

「それに、ゆみこ。あんまり食いすぎると後悔するぞ、ちよつとぐらい運動とかしないと」

「あーしいくら食べても太んないし。あー、やっぱ今日も食べまくるしかないかー。ね、ユイ」

「あーあるある。優美子スタイルいいよねー。でき、あたしちよつと今日予定あるから……」

「だしよ？もう今日食いまくるしかないでしょー」

「食べ過ぎて腹壊すなよ」

「だーかーらー、いくら食べても平気なんだって。太んないし。ね、ユイ」

「やーほんと優美子マージ神スタイルだよねー脚とか超キレー。で、あたしちよつと……」

「えーそうかなー。でも雪ノ下さんとかいう子のほうがやばくない？」

「あ、確かに。ゆきのんはやば」と、いうやり取りを見つつ船橋も昼食の準備をするのであった。

船橋が昼食を食べようとしているとき、後ろでは不穏な空気に包まれていた。

「あの……あたし、お昼ちよつと行くところあるから……」

「あ、そーなん？じゃさ、帰りにあれ買ってきてよ、レモンティー。あーし、今日飲みもん持つてくんの忘れててさー。パんだし、お茶なときついじゃん？」

「え、え、けどあたし戻ってくるの五限になるっていうか、お昼まるまるいながらそれはちよつとどうだろなっ!？」

「は？え、ちよつと、なになに？なんかさー、ユイこないだもそんな言って放課後ばつくれなかったっ!？」

それは突然の出来事だった。

由比ヶ浜と三浦が言い争っている時、凄まじい刺激臭が由比ヶ浜と三浦の鼻と目を攻撃したのだ、周りのみんなもそれに気づいたらしく、急いで鼻をつまみ目を閉じた。

「ちよ、ゲホッ！ちよつと!!何!!なんなのこれ!？」

「窓！窓を開けるんだ!!！」

葉山の叫びに急いでその場にいた男子二人は窓を開ける、するとその匂いには薄れていった。

「はー……はー……助かったー……」

「ちよつと!!誰こんな事したの!？」

三浦は怒鳴るも周りは何でこんな事が起こったのかわからず混乱していた。

そして三浦は辺りを見回し、原因を見つけたのだ。

「ちよつと、なにしてんの?」

すぐさま三浦は、船橋の元へ駆け問いただした。

「え？何って……昼食を食べてるんだけど」

本人のいうとおり船橋はなにもしない、厳密に言えばただ昼食

をとっているだけだった。

問題はその食べているものだった、三浦の周りの人間はうつ、と吐き気を催す、それは海鮮類の入った麻婆豆腐なのだが近くにいるだけでヤバイ雰囲気を出していた。

嗅ごうとするならば一瞬で鼻に激痛が走り、見ようとするならばあらゆる物質が涙腺を攻撃し、とどめにそれを吸おうものなら肺の気管支が全滅しそうなそんなヤバイ雰囲気を出していた、麻婆豆腐であつて麻婆豆腐じゃない、まるで地獄の釜で三百年くらい煮込んでそこにハバネロと唐辛子と無理矢理突っ込んで合体事故を起こし、「オレ外道マーボー、コンゴトモヨロシク」と、いつてきそうなそんな物だった。

もはや色々な意味で麻婆豆腐じゃなかった。

「あんた………これなに？麻婆豆腐？」

「辛味成分だけを固めた殺人兵器？」

と、三浦は苦し紛れに質問すると。

「あーこれね、近くの中華料理店「師職」で出されているものをちよつとアレンジしたやつで………」

「それでこんななるの!?!」

「まあ、プロテスタン系神父さんが絶賛したらしくて、これを食べた人によると何日か味覚がなくなつて、「みかくごろし」なんて呼ばれてたらしいよ」

「どこの外道神父!?!」

「あ、ふなっしー！来てくれたんだ」

「比企谷君、由比ヶ浜さん、不審者っていうのは？」
「あれ」

と、比企谷が指を指した先にはばさつと着ているコートを力強く靡かせて、ぽつちやりした顔にきりりつとやたら男前な表情を浮かべた一人の男子生徒がいた、そして。

「クククツ、まさかこんなところで出会うとは驚いたな。——待ちわびたぞ。比企谷八幡と、意味が解らないことを口走ったのだ。

「いや、誰だよお前」

「むっ、貴様、我が剣豪將軍・材木座義輝のことを忘れたのか……相棒でありながら見損なつたぞー！八幡!!」

（いや、そのなりで剣豪とか花房牧之助かよ）

「ねえ……、ソレ何なの？」

不機嫌、というより不快感を露わにして由比ヶ浜が比企谷を睨み付ける。

「こいつは……俗に言う中二病だ」

「ちゆうにびよう?」

「あー……それね、確か中学二年生ごろに発症すると言われる背伸びしがちな発言をする人のこと……、と言つても厳密には病気じゃないけど」

「なんでもいいのだけれど、その相棒？お友達？あなたに用があるんじゃないの?」

「雪ノ下。間違つてもこいつと俺が相棒だとか友達だとか言うな。俺にはそんな人間は一人としていない」

「ムハハハ、さすがは我が相棒。良く分かっているではないか。我らに相棒も友もない」

「だから相棒なのか相棒じゃないのかどつちなんだ」

言っていることがはっきりしないブレブレなやり取りを聞きつつも船橋は材木座に歩み寄る。

「ところでぎ……材木座君、何か用？」

「むっ、貴様は始めてみる顔だな……はっ！まさか貴様は！古来よ

り伝わる秘術、「縮地」と生まれつき完成された剣術、「天剣」を身に付けていて、そして喜怒哀楽の樂以外が欠落しているあの!!」

「いや、瀬田宗次郎じゃないし十本刀じゃないから、と言うか戦国から幕末になっちゃっているからね?」

と、あきれながらも突っ込みをいれた。

「そ、そうだな、そうであつたか。平塚教諭に助言頂いたとおりならば八幡、お主は私の願いを叶える義務があるわけだな?幾百の時を越えてなお主従の関係にあるとは……これも八幡大菩薩の導きか」
「別に奉仕部はあなたのお願いを叶えるわけではないわ。ただそのお手伝いをするだけよ」

「……ふ、ふむ。八幡よ、では我に手を貸せ。ふふふ、思えば我とお主は対等な関係、かつてのように天下を再び握らんとしようではな」

「はいはいはい、天下だの菩薩だのいいから!早く依頼を言ってくれろ?」

「あああ!すまない……ところで貴様の真名は?」

「真名って……僕は船橋英一、最近引越して来たばかりなんだ、よろしく」

「なん……だと……!?あの高校生探偵の!?!」

「違うからね、それ新一だからね」

「ムハハハすまんすまん、つい調子に乗ってしまった、用というのはそれのことなのだ」

材木座は教室に散らばったプリントを指差す。

「何これ?」

由比ヶ浜が一枚手に取る。それを覗き込むとそれは原稿用紙だった。

「これは、小説か?」

「ご賢察痛み入る。如何にもそれはライトノベルの原稿だ。とある新人賞に応募しようと思っているが、友達がいないので感想が聞けぬ。読んでくれ」

「それならネットに投稿しろよ」

「それは無理だ。彼奴らは容赦がないからな。酷評されたらたぶん死ぬぞ、我」

「ふーん」

そう言いながら小説の一部を流し読みしてみる。

「材木座、本当に俺たちが読んで感想を言っているんだな？」

「もちろんだ。我の自身作に感動し、むせび泣いても一向に構わんぞ」

「……………じゃあ、今日読んでみて明日感想言うから」

「うむ、首を長くして待っているぞ！」

と、言う発言を聞いて彼らは帰るのであった。

「

はく……………疲れた……………」

船橋は疲労して倒れてしまう、学校で材木座が持ってきた小説とやらを読んでいたのだから、酷いっいたらありやしなかった。

ストーリーはぐだぐだ、文はハチャメチャ、設定はあやふやと、見ているだけで苦痛しか感じられない駄作であった、それでも船橋は赤ペンで添削を行っていたのだがほぼまっかつかになるくらい突っ込む箇所があった。

「……………寝よ」

そのまま船橋は眠りについた。

そして翌日。

「失礼します」

と、一言いって船橋はドアを開けると、そこには机に突っ伏している比企谷と、うたた寝をしている雪ノ下がいた。

「……………みんなもあれ読んだんだ」

船橋は察する、そしてみんなとは違ってやけにピンピンしている由比ヶ浜に声をかける。

「由比ヶ浜さん、あれ読んだ？」

「あ、……ごめん忘れちゃった……」
「……そう」

と、いうやり取りをしていると。

「頼もう」

荒々しいノックと共に、古風な呼ばわりで材木座が入って来た。

「さて、では感想を聞かせてもらおうとするか」

材木座は入ってくるなり椅子に座り、腕を組んで偉そうにしていた。自分の作品に相当自信があるらしい。もつとも、自信がある＝名作というわけではない。

「ごめんなさい。私にはこういうのよくわからないのだけど……」

そう前置きをして雪ノ下が切り出す。

「つまらなかつた。読むのが苦痛ですらあつたわ。想像を絶するつまらなさ」

「げふうっ！」

「まず、文法が滅茶苦茶ね。なぜいつも倒置法なの？『てにをは』の使い方知ってる？学校で習わなかつた？」

「人に読ませる気があるのかしら。そうそう、読ませるといえば、話の先が読めすぎて、一向に面白くなる気配がないわね」

「そして地の文が長いしつこい字が多い読みづらい。というか、完結していない物語を人に読ませないでくれるかしら。文才の前に常識を身につけたほうがいいわ」

雪ノ下の容赦ない酷評を前に、材木座は撃沈。体をピクピクしながら床に倒れていた。

「とりあえずこんなところかしら。次は由比ヶ浜さんね」

「え、あたし？え、えーっと、む、難しい言葉をたくさん知ってるね」

「ひでぶっ！」

由比ヶ浜に追い討ちをかけられた材木座。先ほどまでの自身満々な姿は微塵もない。

「ぐ、ぐぬう。は、八幡。お前なら理解できるな？私の描いた世界、ライトノベルの地平がお前にならわかるな？愚物どもでは理解するおとができぬ深遠なる物語が」

材木座は最後の希望とばかりに比企谷の方へと這って来る、もはや
憐れな姿であったが。

「あれなんのパクリ？まあラノベなんてイラストが良ければだいたい
オツケーだから」

「がはっ!!!」

問答無用で、止めを指したのであった。

そして数秒ピクピクして、何とか復活した材木座は今度は船橋に歩
み寄る。

「ふ、船橋よ、貴様はどうなのだ……?」

「まあ、他のみんなとだいたい一緒だけど、突っ込み所がありすぎだ
ね、どんなのがあるのか聞いてみる?」

「……頼む……」

と、言つて船橋と一緒に席につく。

「まず、主人公が地味だね」

話によると、この小説の主人公ははつきり言えば魔王に殺された家
族のために旅に出る、と言うものなのだか。

「いや！地味では無いだろう!魔王に家族を殺されて、その復讐のた
めに倒しに行く!!王道的ではないかっ!!」

「確かに王道っちゃ王道だけど悪く言えばありきたりすぎると思っ
ど……」

次に突っ込む所は、主人公のこの部分だった。

「俺は、あいつを倒すのを諦めないんだッシュ!!」

「この口癖なに?」

「こ、これはちよつとした個性を着けようかと……」

「変すぎるでしょ、どうぶつの森じゃ無いんだから」

そしてメンバーの方の突っ込みをいれた。

「あと仲間になる奴なんだけど、ジョブの名前も中身も複雑すぎる上
に問い詰めてみるとほとんどが似たようなものばっかで混乱するん
だけ」

「ごちゃごちゃとしているのだが、ほぼ全員が攻撃、防御、回復、支
援を行うという勇者みたいなポジションであった。」

「そ、それはいかなる時でも安定した戦績を出すために……」
(FF12かよ)

「あと、序盤で仲間になる盗賊？ ぽい奴居るよね、こいつなんで盗賊なのに盗みとか鍵開けを行わなかったり、追われなかったりしないで普通に過ぐしているの？」

「あ、いやそこまで考えていなくて……」

これは、設定ではこう書かれているものの全く生かされてないという、死に設定という奴だ。

「あとは「もういい解った」？」

材木座は立ち上がり、話を中断する。

「材木座君？」

「貴殿に言われて、私の小説がいかに杜撰であったかがよく解った」

さつきまでとは違い、やけに清々しい表情をしていた。

「また読んでくれるか」

「お前、あれだけ言われてまだやるのか」

「無論だ。確かに酷評されはした。もう死んじやおつかないどうせ生きててもモチないし友達いないし、とも思った。むしろ、我以外みんな死ねと思った」

「おい。そのみんなには俺も入ってるのかこのやろう」

「だが。だがそれでも嬉しかったのだ。自分が好きで書いたものを誰かに読んでもらえて、感想を言ってもらえるというのはいいものだ、しかも至らぬ点を的確説明してくれるなんてやっぱり嬉しいよ」

比企谷のツツコミを華麗に流した材木座はさわやかな笑顔を浮かべて言った。

「また新作が書いたら持ってくる」

「そう言い残して材木座は教室を出て行った。」

「

「……これでああ依頼は完了だね、じゃあ僕は帰るから」

と、言っ出ていこうとすると。

「……お前ってすごいな」

「?なにが？」

比企谷が話しかけてきた。

「いや、あんなもの読まされて平気でいられるんだな」

「いや、あれはきついよ……まあそれでもちやんとダメな所は言つてあげないと……」

と言つて、船橋は去るのであつた。

「

第五話 血染めの庭球場

「97、98、99、100……」

朝六時、船橋は中庭にある道場で逆さ吊り腹筋をしていた。

逆さ吊り腹筋とは、その名の通り逆さまになった宙ぶらりんの状態で、腹筋を行うのである。

映画かよ、と鼻で笑う人は一度やってみるといい、とにかくキツイ、何せ普通の腹筋とは違いモロで重力に逆らわなければ出来ないため、相当な気力と体力が必要なのだ。

しかしその分筋肉は付く上、デスクワークなどで圧迫され続けている腰をグイーンと伸ばすことができ、現代のビジネスマン達の腰の疲労や肉体のバランスを回復させるうえでもかなり良い効果があると言われている。

しかし朝のトレーニングはこれで終わらない、この後片手で腕立て伏せ、シャトルラン、バーベルを使ったスクワット、懸垂、ランニングを行うのである。

なぜここまで体を鍛えるのかというと、祖父の巖一郎がこんなことを言っていたからだ。

「いいか英一、今この世は非常に不安定なんだ、見た感じではたいした騒動もなく平和そのものだが、それでも犯罪の類いは消しきれない。いづどこで命が狙われても可笑しくは無いんだ、そんなことになっても大丈夫なように体はちゃんと鍛えてなさい」

と、言われたためである。

ちなみに祖父は世界対戦の生き残りらしく、そのときの話をしよつちゆう聞かされていた。

「あそこは醜悪極まりない所だったよ、マラリアと言った病気で、敵の銃撃をくらい、爆撃されたり、それで周りの者はことごとく亡くなったもんだ」

「生き残ったものたちは英雄だの持て囃されたもんだがわしはそうは思わない、少なくとも敵が悔やみながら亡くなるのを笑って無視する奴が英雄だと思わんがね」

と言った話を聞いていた事を思い出した、巖一郎はそんな戦時中にいたからこそ船橋に常在戦場の精神を忘れるなど、言っていたのだろう。

「大丈夫なようにか・・・」

と、一通りのトレーニングを行ったあと、船橋は呟く。

「さて、シャワーを浴びてご飯にするか」

「おーい！こっちこっち!!」

「ほいさ」

「ナイスパス！このまま突っ込むぞ！」

今船橋はサッカーをやっている、今日から体育ではサッカーかテニスをやることになって、船橋はサッカーをやることにした。

ちなみにこの中にはサッカー部である葉山と戸部も入っていた。

「よっ、ほっ、そいやっ」と

「おー！すげえべー！さすが隼人くん!!」

(さすがサッカー部、経験者は違うなー)

さつきから他の人たちと違い一線を凌駕プレイを行っているのは葉山と戸部、経験者だからなのか動きにキレがあった。

「よし！今だ船橋くん！そのままシュートだ!!」

「いけー!!決めちゃってー!!」

「あ」

気がついたら船橋はゴールの近くにいて、ボールがこっちに回ってきたのだ。

「よし、シュート!!」

と、気合いをいれてボールを蹴るのだが。

「っ！また……」

「「あー……」」

見当違いのところへ飛んでしまい、そのまま試合終了してしまうのであった。

「よ、さっきは残念だったねーとりま、ドンマイってことで」

「……ちえー、ボールが必ず変なところについてちゃうんだよなー」

「はは、馬鹿力で蹴ったってダメさ、体全体で蹴るようにしないと。」

と、いうやり取りをしたあと船橋は別れた。

「すごいなー隼人くんは、五人も一気に抜いただけでなくシュートも決めんだなんてなー」

「ははは、こんなの普通さ、お前だってできるだろ」

「いやいや、隼人くんのは別格だべ」

「今度教えてよ」

そして、休んでいると葉山を中心として何やら騒ぎが起こっていた。

「よし、俺も！いつちに、さんあ!!やべっ!!」

と、戸部は葉山のようにリフティングをしていたのだが失敗してしまい、ボールがこちらに飛んできた。

「あーごめん船橋くーんちよつと投げてくんない?」

「ほい」

「サンキュー」

と、やり取りをして体育の時間は終わったのだ。

「あーはみ出ちゃった……」

そして放課後、船橋はまた創作活動を行っていた、今回はアクリル画。

アクリル画とはその名の通りアクリルガッシュという絵の具を使った画法、そしてアクリルガッシュとはアクリル樹脂と顔料を混ぜた絵の具で速乾性があり、ムラがなく、乾くと水を弾くという性質がある。

しかし、それだけでなくある特徴がある。

それは、アクリル画は水彩画と油絵中間に位置している画法で、大量の水で溶かせば水彩画風になり、あまり水を加えなければ油絵風になるのだ。

そして水彩と油絵にも言えることなのだが、ただ絵の具を塗ればいいというわけではない、一ヶ所の部分に最初に塗った色とは違う色を混ぜた色か、または薄めた色を使うことで臨場感を出したりすることが大切なのだ。

ひとつだけの色で塗ったものと、たくさん種類の色で塗ったものは一目瞭然、後者の方が圧倒的に見映えがよい。

そう、アクリル画は人生だ、絵の具は経験を表してたくさんぬ
「船橋くん？」

「はい!!あ、雪ノ下さん」

「全く、相変わらず絵を描いていると周りが見えなくなるのね」
「ところで、今度は何？」

「……テニス部強化の依頼が来たけど、あなたも参加する？」

(確かこれは途中で三浦の奴が乱入して……)

「解った、参加するよ」

「ところで、あなた何描いているの？」

「富士山」

「……以外に上手いのね」

そして翌日の放課後、船橋はテニス部強化のためテニスコートに向かった。

「あれ？何で材木座君がいるの？」

そこには、この前出会った材木座がそこにいた。

「おお、船橋殿か！ここでまたで会うとは!!やはり貴殿とは切っても切れない深く、固い縁で結ばれているわけだな!!」

「あーハイハイ解った、所で君は確か……」

「あ、まだ自己紹介してなかったね。僕は戸塚彩加、同じクラスメートだよ、よろしくね」

「うん、僕は船橋英一、よろしく」

軽い自己紹介を済ませたあと、早速トレーニングに移ることにした。

「それでは戸塚くんに足りていない筋力上げていきましょう。上腕二

頭筋、三角筋、大胸筋、腹筋、背筋、大腿筋、これらを総合的に鍛えるために腕立て伏せ……とりあえず、死ぬ一歩手前ぐらいまで頑張つてやってみて」

「いやいや、何言っちゃってんのそんなことして怪我でもしたら大変でしょ」

「許さんぞ！我の天使に手をかけようなぞ！」

馬鹿な事を言っている材木座は放っておいて、船橋は雪ノ下に抗議する。

「お前、戸塚を潰す気か」

「そんなわけないでしょう。超回復というものを知らないのかしら？」

「超回復以前に雪ノ下さんはできるの？」

「なんですつて？いいわ。私が無理でない事を実際にやってみて教えて上げる」

そうして雪ノ下は脚を由比ヶ浜に抑えてもらいながら腹筋を開始する。一回、二回、三回と数を重ねていく雪ノ下だったが……。

「はあっ、はあっ、はあっ」

五回したところで息が上がっていた。それでもなんとか続けようとする雪ノ下だったが、力尽きて倒れてしまった。

「………」

誰も何も言わない。あれだけ偉そうなことを言っておいて、自分は十回もしないうちにギブアップとは赤っ恥物である。

「雪ノ下………。今でもまだ死ぬ一歩手前まで、とか言うつもりか？」

「う、うる、うるさい、わねっ。きよ、今日はちよつと、調子が、悪い、だけよっ」

「ゆきのん、体力ないんだね」

「我も運動できるわけではないが、腹筋なら十回ぐらいはできるぞ………」

「それじゃあ、船橋君はどうなの……」

「え、僕？一応できるけど自分のはちよつと特殊っていうか……」

「いいからやりなさい」

と、言われたので仕方なく朝やった逆さ吊り腹筋をするために手すりに向かい足を引つ掻けた。

「ちよ!?ふなっしー!?何やってんの!」

「何って・・・僕の腹筋はちよつと特殊だから」

「ふざけているの?そんな事できるわけ」

雪ノ下が話す前に船橋は逆さ吊り腹筋を軽々で行った。

「・・・すげー・・・」

由比ヶ浜と比企谷は呆気にとられ。

「わーすごい!僕テレビでしか見てないけど実際にやってる人なんて始めてみたー!!」

「おお!あんな腹筋を軽々で行うとは!!貴様は少林寺のものだったのか!!」

戸塚と材木座は素直に称賛し。

「・・・」

もはや雪ノ下は口を開けたまま呆然としていた。大口を叩く技量どころかあまりにも桁外れな行動をしている船橋を見て頭の中は、畏怖と憎悪と嫉妬と驚愕と言った感情がぐちゃぐちゃになっていた。

こうして雪ノ下に指導役をやらせるのは間違っているということ、船橋が指導役となる。ちなみに雪ノ下は体力を使い果たしたので、木陰で休んでいる。

「じゃあまず一回模擬戦をやってみようか、そこからどこをどう伸ばすのかを決めていこう」

こうして戸塚の特訓が開始した。

そして翌日、本格的な特訓が始まった。

「いいかい?戸塚くん、君はパワーでねじ伏せるよりもテクニクで相手を翻弄するのと、持久戦に持ち込ませて戦うのが得意なタイプだ。」

だからサーブのコントロールとスライスの技術を鍛えるのと、スタミナを増やすために持久走を行おうと思う、いいね?」

「うん、お願いしますー!」

「れ、練習だから……」

だが、三浦はそんなことはお構いなしのようだ。

「ふうん、でもさ、部外者混じってるじゃん。つてことは別に男テニだけでコートを使ってるってわけじゃないんでしょ？」

「そ、それは、そう、だけど……」

「じゃ、別にあたしら使っても良くない？ねえ、どうなの？」

「……だけど、」

そこまで言ってから戸塚は俯く、そして雪ノ下が反論する。

「ちよつと待ちなさい。後から来た分際で何を勝手な事を言っているのかしら」

言わずもがな、雪ノ下である。

「ここは戸塚くんが正式な許可をもらって使用させてもらっているのよ。それを横取りするつもりかしら」

「はあ？そんなこと言ったらあんたたちだって部外者じゃん。人の事言えなくない？」

「私たちは戸塚くんに頼まれて彼の特訓に付き合っているのよ。私たちがはれつきとした関係者よ」

「あ、そうなのか、悪かったね」

と、言って葉山は。

「優美子、また今度にしよう、今日の所は先客がいることだし」

三浦にそつと語りかける、しかし三浦は。

「はー？隼人、何言っちゃってんの？あーしはテニスしたいんだけど……じゃちよつと準備するから」

それを無視して駄々っ子のように一方的に進めていた。

それを受けて葉山ため息をつき、メンバー達に小声でこう言った。

「ちよつと、平塚先生呼んできてくんないかな」

「え？いいの？やったら三浦から何言われるかわかんないじゃん」

「仕方ないだろ、ああなったら止められない、一応俺残って説得してみるから戸部、手伝ってくれないか？」

「あ、うん解った」

と言つて、海老名と、大岡、そして大和は先生を呼びに行った。

「さてと……」

葉山は何とか説得して穏便に済ませようとしたのだが。

「じゃあさー勝負しようよ、あたしが勝ったら私たちが使うことにして戸塚の練習も付き合う、これでいいでしょ」

「あら、上等じゃない」

肝心の方はもう勝負をするところまで進んでしまっていた。

「おい優美子、何やってるんだ!？」

「何ってここを賭けて勝負するの、隼人も手伝ってよ」

「だから今じゃなくて!」

葉山は何とか辞めさせようとするも、戸部が方を叩き。

「これはもう無理だべ、先生呼んできたほうが……」

「……そうだな……」

と溜め息を吐き、先生を呼びにしようとした次の瞬間。

「きやあああああああああ!!!」

三浦の悲鳴が聞こえたため急いで後ろを振り向くと。

テニスラケットで三浦の顔をぶん殴る船橋の姿があった。

その数分前、船橋は三浦を止めようとしていたときだった。

「

「……………」

そして船橋は幽鬼のように立ち上がり、テニスラケットを握る。
そして、

「へ？」

三浦に突っ込み殴りかかったのだ。

「つうー……ちよつとーなにす」

バキイ！と、三浦が怒鳴る前に船橋がテニスラケットで三浦の顔を
をフルスイングで殴り、そして蹴り飛ばされる。

そして仰向けに倒れた美浦にのし掛かり、今度はラケットでなく拳
とそしてキックで、三浦を攻撃する。

「おい、何やっちゃってんの!？」

「やめろっ!!」

急いで止めるがべく、葉山と戸部は腕をつかみ込むものの。

「う……う……う……う……」

「え!?う、うわわわわわ!!」

葉山と戸部は持ち上げられ、ぶんと壁に叩きつけられた。

「があっ!!」

「うがっ!!」

そして痛みで悶絶しているの確認すると、また三浦に近づいた。

「や、やめて……許じて……ぐださい……もう、近づきませんし、邪魔、とかじま、ぜんから……」

と、涙でぐちゃぐちゃな顔になりながら三浦は懇願するものの。

「あぎやっ!!!!」

船橋はそれを無視して首をつかみ、壁に叩きつけるのであった。

「……………」

目の前の惨状をみて、雪ノ下は言葉を失っていた。

確か相手は勝手に乱入してきて勝負をしようと言って来た奴だった、そこで自分は自分の實力を見せつけて追い払おうとした時だった。

船橋が突然三浦を襲撃したのだ、そのあと男子二人が止めにかかるも投げ飛ばされ、壁にぶつかり気を失った、そのあとまた三浦の攻撃を再開した。

一体どうゆうこと? 何でこんなことに?

と呆然としていると。

「ゆきのんっ!!ふなっしーを止めて!!このままだと優美子死んじゃうよ!!」

「雪ノ下さん! 材木座君! お願い! 船橋君を早く止めて!!」

「いや、我には無理だ、確実に巻き込まれる……」

由比ヶ浜と戸塚か涙ぐんで助けを求め、

材木座が狼狽えているのを見て、雪ノ下は我に帰る。

そして三浦の方を見てみると凄まじいことになっていた。

顔面は血と傷と痣だらけで痛々しいことになっており、手首と足首

の方もたくさんのおかしきものが見えた、恐らくいや絶対に骨折しているであろう。

肝心の三浦自身は意識がないのか、目は半開きで口をあぐりと開けたままになっていた。

そして壁や地面には所々血痕らしきものが見えていた。

急いで止めないと、と思った矢先船橋は階段で上の方に上がっていった。

「何を……」

「!?まさか!!」

急いで船橋の元へ向かう、不味い、そのまま船橋は下に飛び込んで三浦を地面に叩きつける気だ、そんなことしたら三浦は確実に死に至る!!

急いで駆けつけようとするが、間に合わず船橋は飛び込んでしまった。

「っ!!!」

雪ノ下達は目をそらした、そして目に写ったのは。

「はあ……はあ……」

「……」

葉山か三浦の下に飛び込みマットになったことで最悪の事態は免れたのであった。

そして船橋はそのまま気を失い、倒れるのであった。

「ふ、ふなっしー!?ふなっしー!!」

「三浦さん!?船橋君!?しっかりして」

「なんだなんだ!?一体何が起こったんだ!?」

その後、駆けつけた平塚先生が急いで病院に連絡したことによって、三浦は緊急搬送された。

たくさんのお骨折が見られたものの命に別状は無いらしい。

そして船橋はそのまま意識が戻らなかったため、保健室で安静にしていた。

所変わって、ここは職員室にある個室で、そこには呼ばれた比企谷、雪ノ下、由比ヶ浜、戸塚、材木座、葉山、戸部、そして怒りの形相で睨み付ける平塚の姿があった。

ちなみに海老名と、大岡、そして大和は呼びに行っていて、この騒動に関わっていないかったという事で、御咎め無しとなった。

「三人に呼ばれて来たと思ったら……三浦は半殺しにあって気絶していて、それを行ったのは船橋で……貴様ら……」

平塚の顔はいつにも増して険しかった。

無理もない、こんな暴力沙汰を起こすだなんて人間としても、教師としても許すわけにはいかない。

「お前らっ!! 一体なんでこんなことになったんだ!? 説明しろっ!!」

と、激しく鬼気迫る怒号が部屋全体に響く。

ほとんどが萎縮してしまい顔を俯かせてしまう中、立ち上がったのは葉山だった。

そして頭を下げ、こう言った。

「すみません、今回の件は俺らに原因があるんです」

「なんだと?」

そして葉山は、三浦が奉仕部達の意見を無視して勝手に入り込んだ事、止めようとしたのだが無視して勝負をすることになってしまった事、その矢先船橋が三浦を攻撃したことを伝えた。

「それで? 君達は何もしなかったのか?」

「いや説得しようとしたのですが……」

チラリ、と雪ノ下の方を見て言葉が詰まるものの、葉山はこう言った。

「なんか、あっちの方もノリノリだったのでできませんでした」

と言うと雪ノ下はガタン！と立ち上がる。

「何をいつているの？あなた達が入り込んできたからでしょう!？」

「嫌、俺らじゃーねーだろ！」

「そっちだって被害者面できる立場か！何で追い出さないで勝負なんかしてんだよ！」

「やめろっ！席につけ!!」

雪ノ下と戸部、そして葉山は言い争いになるも平塚によって止められる。

「それで雪ノ下、何でお前は戸塚の依頼そちのけで勝負しようとしたんだ？」

「そ、それは……」

雪ノ下は返答に困ってしまう、売られた喧嘩を返さなければ、そんな自分勝手な理由でだなんてとても言えなかった。

それを見た平塚はこう返した。

「雪ノ下、依頼を遂行するのであれば、なるべくそういう私情とは切り離して行え。自分のプライドのために他人を困らせるな」

といわれ、俯いてしまう。

「まあ、今回は三浦に原因があるということ、済ませよう。あと、怒鳴ってすまなかった」

と言って平塚は頭を下げた。

「あの、船橋くんは大丈夫なんですか？」

戸塚は訪ねると、平塚はため息を付き。

「……まだ目を覚ましていない、しばらく安静にさせていた方がいい。じゃあここで解散にするから、各自寄り道しないで帰るように」と言って平塚は部屋を出て行った。

そして、同じように葉山と戸部も出ていき、その後由比ヶ浜、比企谷、材木座も出て行って行った。

「大丈夫か？」

「ああ……まだちよつと痛むけど……」

「にしてもひでー奴だな、船橋は！」

「だな」

「……………」

それぞれが船橋の悪評を言っていく中、葉山と戸部は違う感情を
持っていた。

それは、「畏怖」という感情だった。

「あのさ、あいつの事なんだけどさ……あいつ、ただもんじゃねえぞ」

「え？そりやそうだろ、三浦にあんなことするなんてさ」

「そうじゃなくてさ……あいつ、もう高校生じゃ無いって言うか……………」

「どうゆう事なんだ？」

「……俺らを掴んで壁に叩きつけたんだ」

それを聞き、みんなは驚く。

「え!?それマジ!？」

「あれは、もうゴリラだべ・・・運動系の部に入ってたなら、もうスタメンどころかエースだべ・・・」

「・・・そうなんだ・・・」

と、話ながら帰路についた。

「new page」

あの後意識が戻り、船橋はそのまま家に帰宅した。

そして、英一は巖一郎に呼ばれた。

「英一、お前がなんでここに呼ばれたのか解るな?」

「うん・・・」

徹清は鋭い目付きで英一を睨み、そして険しい顔をしながら巖一郎は巖かな声を挙げる。

言わずもがな、あの事をいつているのであろう。

「午後五時半ごろ、平塚教諭からお前が暴力を振るつたということも聞いた。」

私は以前お前に言ったはずだ、いつどこで命が狙われても可笑しくは無い、そんなことになっても大丈夫なように体はちやんと鍛えておけと」

そして、巖一郎は怒鳴る。

「しかしお前はそれを悪戯に、しかも相手に致命傷を負わせるために使った!!」

それを聞き、英一は顔を伏せてしまう。

「顔を上げろ、英一何でこんなことをしたのか、説明しろ」

「・・・解らないんだ」

「は?どうゆう事だ」

「何て言うかさ、三浦さんを見ていたら変な事を思い出してさ」

「変な事?」

「なんか、僕に酷いこと言ってきたり、あと・・・殺そうと」

と言いかけた時、徹清と巖一郎は血相を変え近づいてきた。

「おい!英一!!その話しはするな!!今回の件は胸にしまっておくから、金輪際その話しはするな!!」

「え？何で？」

理由を聞き出そうとするも巖一郎に、

「とにかく辞めろ！次この事を話そうものなら家族の縁を切るからな！！」

と、言われ黙ってしまふ。

「わ、解ったよ……」

「……………怒鳴ってすまない、今日はもう寝なさい」

そう言われた英一は自分の部屋に向かうため部屋を出たのだ。

「テツ、どうゆう事なんだ、ちゃんと治療は成功した筈だろう!!」

「俺が知るか、確かに治療は上手くいった！それがなんで…………」

「……………とにかく原因を調べる必要があるな、テツ連絡を！」

「分かった、おいらーか？ーからーに關係する情報をー」

というやり取りを壁の向こう側で聞いていた。

「なあ、エリ」

「何ですか？」

「僕、船橋英一って何者なんだ？」

「……………自分にもさっぱり…………」

「そうか…………」

とりあえず船橋は寝ることにした。

第六話 船橋英一は謎を解明しようとする

テニススコートの惨劇からしばらくたって、今はテスト前の時期になつていた。

しかしそれでも、あの事件の爪痕は少なからず残つてしまつてゐる。

まず奉仕部とその他の人々は被害者というわけなので御咎めなし、なのだが船橋が暴れまわつたテニススコートの後始末を命じられてしまつた、今ではあらかた補修さたのだが。

ちなみに練習の方は再開され、この前のような騒動は起こらず、平穩に終えることができた、その後戸塚から

「その、本当にごめんね、何もできなくて

あと、追い出してくれて、ありがとう」

と、若干悲しい顔をしつつも笑顔でタオルセットをプレゼントしてくれた、ありがたく受け取つておこうと船橋は思った。

しかし三浦と船橋は困つたことになつていた。

船橋の激しい暴行を食らつた三浦は何日か意識が戻らず、戻つた後も激痛に悶絶し、また気絶するのを繰り返しながらも翌日何とか退院することができた。

ただ若干の後遺症が残つてしまつたらしく、時々発生する痛みには顔をしかめるのを何回か見かけた、おまけに船橋を見かけるとまるで親の仇を見るかのように殺意を込めて睨んでいた、自業自得なのだが。けど問題はそこではなかった、どうもあの事件は学校中に尾ひれが付いた状態で流れてしまつたらしく、さつき聞いた話では。

「船橋英一は普段はおとなしいが、キレると情け容赦なく悪・即・斬を掲げ、裁きの鉄槌を下す」

「三浦優美子はテニス部の練習に乱入するという悪行を行ったため船橋に粛清された」

と、言うところまでになつてゐるらしい。

「はあ……しばらくおとなしくしてよ……」

と、静かに呟きながら歩いていると、話し声が聞こえた。

「ねえ聞いた？この前の事・・・」

「あー知ってる、船橋君だっけ？三浦さんをボコボコにしたってやつ・・・」

やはり、船橋と三浦の事だった。

「なんでも、テニス部の練習に勝手に入り込もうとしたんだって・・・」
「それで船橋君は半殺しにしたんでしょ、

あたしの方もそれで持ちつきりだよ、すごいよね」

「てゆうかさ、あの人前から何か凶に乗ってない？」

「あーわかるーバレー部にも乱入してきたっていうし」

「それにさ、さつき見たんだけど「何であーしが悪いの!?!あいつは悪くないの!?!」って怒鳴り散らしてたらしいよ・・・」

「うわー・・・近くにいた人、災難だったねー・・・」

「にしてもさー、船橋君ってすごいよねーまるで正義の味方みたい!」
「まあそうだねー、ぶっちゃけあの三浦さん見てざまー見ろって内心思っちゃった」

と言うやり取りを聞き流す。

どうも三浦の評判は前から悪いようだ。

しかも自分はいつの間にか正義の味方という扱いを受けている、そして船橋は苦笑する。

(あんなことやる奴のどこが正義の味方なんだろうな・・・)

「new page」

そして何となく部室前を通ってみると、なにやら騒いでいた、よくみるとテスト勉強をしているようだ。

(この前の事もあるし、ちよつと寄ってみるか)

と、思いつつ部室に入る。

「あ、ふなっしー・・・」

「おお船橋殿、もう大丈夫なのか」

「・・・」

由比ヶ浜と材木座は戸惑いつつも心配し、雪ノ下は若干怒りを込めつつ睨んでいた。

「あ、えーつと・・・この前はごめん、暴れちゃって・・・」

「別に構わないわ」

突然の返答に船橋は驚く。

「あれは普通に追い出せばいいにも関わらず挑発に乗って勝手に勝負を申し出た私にも責任があるわ」

「そ、そうかじゃあ」

「だけどね」

ほっとした束の間、雪ノ下は鋭利な口調で話を続ける。

「あなたのやった事は、どんな大義名分があつたとしても許される物ではないのよ」

「で、でもゆきのん、ふなっしーが動いてくれたから続けられたわけだし……」

「それはそれ、これはこれよ」

あわてて由比ヶ浜がフォローをするも雪ノ下は構わず話し続ける。

「三浦さんはあの後病院に搬送されてそのまま入院、退院後も後遺症で苦しんでるといわね、負い目を感じたってこの事実が変わらない事を覚えておきなさい」

雪ノ下はハッキリとそう告げた。

「……うん、分かった」

「ところであなたは何しに来たの？」

「たまたま通りかかっただけで、そっちは何してるの？」

「テスト勉強してるのよ」

よく見ると、様々な教科本が開かれていた。

「由比ヶ浜さん、ここ、また間違えているわよ」

「え？うそ?!絶対これで合ってると思っただのに〜!」

どうも由比ヶ浜の学力向上は滞っているようである。なにせ、いま雪ノ下が教えているのは中学生レベルの問題で、ここ総武高校は進学校なのに受かったものである。

「うう、頭が痛いよ、分からなさすぎるよ……」

「仕方が無いわね。これ以上無理に続けても効率が悪そうだし、休憩にしましょうか」

雪ノ下が由比ヶ浜の様子を見て一息入れることを提案する。

「ほむん。休息。それは戦士にとって、来るべき大いなる戦いに備えて力を蓄える時。我はこれより精神統一し、我の力を極限まで高めなければならぬ。すまないが八幡と船橋殿よ。これより我に話しかけるのは止めてくれ。例え我が盟友八幡と船橋といえども、この一時を邪魔されては敵わんからな」

などと偉そうなことを言っつて、材木座は腕を組んで目を閉じる。

ピロピロリン♪

そんな時、不意に携帯の着信音が鳴る。

「あ、あたしのだ」

どうやら由比ヶ浜の携帯にメールが届いたらしく、由比ヶ浜は携帯の画面を開く。

「うわ……」

だが、画面を見た由比ヶ浜は曖昧な笑みを浮かべ、深い深いため息をつく。

「由比ヶ浜さん、どうかしたのかしら？」

その様子に疑問を持った雪ノ下が尋ねると、由比ヶ浜が微妙な表情を浮かべて答える。

「いや、うん……。なんか最近、変なメールが送られて来ることがあって、それが今あたしのケータイに届いたんだよ。これなんだけどさ……」

そう言っつて由比ヶ浜は携帯の画面を差し出す。その画面を見るとそこにはこう書かれていた。

『戸部は稲毛のカラーギャングの仲間ゲーセンで西高狩りをしてた』

『大和は三股かけている最低の屑野郎』

『大岡は練習試合で相手高校のエースを潰すためにラフプレーをしていた』

その文面を見て雪ノ下が口を開く。

「チェーンメール、ね」

「うん……」

チェーンメール。確かこれは送らないと不幸になるとか、よくない

ことが起きるとか訳の解らないことの書かれているやつと船橋は思った。

コンコンコン。

俺がそんなことを考えていると、部室の戸をノックする音が聞こえてきた。

「こんな時に誰かしら?」

「さあな。どうする? 追い返すのか?」

チエーンメールと依頼者。どちらを優先するか。

「……そうね。平塚先生の紹介できたのであれば無下にはできないし、とりあえず聞くだけ聞いてみましょう」

雪ノ下はそう言つて「どうぞ」と来訪者に入室を促す。すると扉が開いて来訪者が入ってくる。その人物は意外な人物だった。

「ちよつといいかな? 依頼しに来たんだが」

「げ」

船橋は驚く。

そう言つてやつて来たのは葉山だった。

「うーん……そっちはお取り込み中か、忙しい所ごめんな」

葉山は詫びるも雪ノ下は心なしか、いつもより声は刺々しくして話しかけてきた。

「何か用があるからここへ来たのでしょうか? 葉山隼人君」

冷たい響きを滲ませた雪ノ下の声に若干顔をしかめつつも話を続ける。

「ああ、そうだった。奉仕部つてここでいいんだよね? 平塚先生に悩み事を相談するならここだって言われてきたんだが」

「そうだからさっさと用件を言え。用件が無いなら俺は帰るぞ」

「ああ、ごめん。これなんだ」

葉山はそう言つて携帯を取り出し、画面を俺たちに向けてくる。そこには先ほど見た物と同じ内容の物が表示されていた。

「おい、これって……」

「由比ヶ浜さんに送られてきたチエーンメールと同じ物ね」

携帯をしまいながら葉山が続ける。

「これが出回って、どうも周りが疑心暗鬼になっていてる上に、友達のこと悪く書かれてて困ってるんだ」

そう言う葉山の表情は先立っての由比ヶ浜のように、正体のわからない悪意にうんざりした顔だった。

相手はつきりすればどうとでもなるのだが、分からない場合は正直どうしようもない。抱いた感情をどこにぶつけなければいいのかも分からないのだから。

「止めたいんだ、ハッキリ言って迷惑だから。あ、犯人捜しもいいけどなるべく慌ただしくしない方法を知りたい。頼めるか？」

もしチェーンメールの事を先生に告げれば立场上、先生は全生徒に向けて聞き込みを行い、事態の收拾を図らなければならない。しかし、それは葉山の望む形ではないので、平塚先生にはおぼろげなことしか述べなかったのだろう。そうしたら奉仕部に来たのだ。

「つまり、事態の收拾を図ればいいのね？」

「うん、まあそういうこと」

「では、犯人を捜すしかないわね」

「ちよつとまで、そんな事して大丈夫なのか？」

どうやら雪ノ下も俺と同じ考えだったらしく、犯人を捜すという結論に至ったようだ。

前後の流れを完全に無視された葉山は一瞬驚いた顔を見せ、雪ノ下の意図を問う。

それに対し、雪ノ下はその葉山の顔を侮蔑するような顔と共に話し始める。

「チェーンメール……。あれは人の尊厳を踏みにじる最低の行為よ。自分の名前も顔も出さず、ただ傷つけるためだけに誹謗中傷の限りを尽くす。悪意を拡散させるのが悪意とは限らないのがまた性質が悪いのよ。好奇心や時には善意で、悪意を周囲に拡大し続ける……。止めるならその大本を根絶やしにしないと効果が無いわ。ソースは私」
「お前の実体験かよ……。まあ、雪ノ下の言う通りだがな。しかも汚いのが、チェーンメールの発端人は隠れてやってるってことだ。自分がチェーンメールの仕掛け人だつてことが判明すれば周りから袋叩

きになるのは必至。そうならないように誰が送り主か分からないようにするってことは、周囲に敵視されたくないって事。自分が傷つく覚悟も無いのに他人を傷つけようとするとか、どんだけ卑怯者だっということだよな」

「まあ、その犯人さんは自業自得で御愁傷様と言うわけで、それに丸く納めるにしても、そんな傍迷惑をかける人は痛い目に遭わないと止めようがないし」

「比企谷くんと船橋くんの言う通り。とにかく、そんな最低なことをする人間は確実に滅ぼすべきだわ。目には目を、歯には歯を、敵意には敵意をもって返すのが私の流儀」

どこか聞き覚えのある言い回しに由比ヶ浜が反応する。

「あ、今日世界史でやった！マグナ・カルタだよね！」

「ハムラビ法典だよ」

さらりと切り返すと雪ノ下は葉山に向き直る。

「私は犯人を捜すわ。一言言うだけでぱったり止むと思う。その後どうするかはあなたの裁量に任せる。それで構わないかしら？」

「じゃあ付け加えてもいいか？犯人が分かったとしても絶対に周囲に事実を公表しない、解決するのであればなるべく秘密裏に行つてくれ」

突然の一言に周囲は反応する。

「え？なんで？」

「そんな事をしてその情報が露見したら、周りはそれをネタに一方的に糾弾するだろう？そんなマスゴミ染みた事はさせたくない」

「何甘いことをを言っているの、やるからには徹底的にやらなくちや止められないでしょう？」

「雪ノ下さんはその人の気持ちを無視して自分勝手な正義感で一方的に傷つけるのは良いのか？」

「つつ……」

「それに自業自得であれ、これを受けた人は怒りを覚えるに違いない、そして復讐心からさらに酷いことをする、そしてまた周囲は攻め立てて……こんな負の連鎖を巻き起こすわけにはいかない」

葉山の意見に船橋と雪ノ下は唇を噛み締める。

確かに事実を知ったとしたら周囲は必ずやり返すであろう、しかしさつきも言ったようにいくら悪を制裁するとはいえ相手を攻撃することは許される事ではなく、下手すれば取り返しの付かない事になるのはこの前のテニススコートの件でよく知っているだろう。

「というか、そんな事をするってことは犯人と同じ加害者になるって訳だからね」

「……………わかったわ」

「すまない」

雪ノ下は若干納得がいつてなかったが、この話を聞き渋々同意し、葉山は申し訳なく謝罪した。

「メールが送られ始めたのはいつからかしら？」

「先週末からだ。な、結衣」

葉山が答えると由比ヶ浜も頷く。

「先週末から突然始まったわけね。なら、先週末にクラスで何かあったの？」

「……………関係あるのか解らないけど、優美子の陰口を叩いてたな」

「あ……………」

葉山は由比ヶ浜は暗い表情をする。

「なら、比企谷くん、船橋君あなたは？」

「何もなかったと思うな」

「いや、君平塚先生に職場見学の件で公開処刑のごとくドヤされてたでしょ」

実はさつき比企谷は、希望見学場所と希望する職種に、専業主夫と書いた結果、平塚先生に書き直しを言われたのを思い出す。

「……………うわ、それだ。グループ分けのせいだ」

「どうゆう事だ？」

俺の答えに由比ヶ浜が反応し、それに葉山がきよんとした顔で聞く。

「いやー。こういうイベントごとのグループ分けはその後の関係性に関わるからね。ナイーブになる人も、いるんだよ……………」

「つまりあれか？職場見学のグループ分けて自分の思うようなグループに入りたいたからチェーンメールを送ったということか？」

「うん。そうだと思う」

「なら、葉山君、書かれているのはあなたの友達、と言ったわね。あなたのグループは？」

「いや、まだ決めてない。とりあえずはその三人の誰かと行くことになると思うけど」

「犯人、わかっちゃったかも……」

由比ヶ浜がげんなりした表情で言った。

「説明してもらえるかしら？」

「うん、それってさ、つまりいつも一緒にいる人たちから一人ハブになるってことだよな？四人の中から一人だけ仲間外れができちゃうじゃん。それで外れた人、かなりきついよ」

実感のこもった声に誰もが黙り込んだ。

「……では、その三人の中に犯人がいるとみてまず間違いないわね」

雪ノ下がそう結論を出すと、葉山は反論する。

「おい、何でそうなる？あいつらは被害者何だぞ、自分で自分の悪評書く意味が解らないんだが？」

「バカかお前、そんなの自分が容疑者じゃないようにするためにわざと書いたんだろ」

「じゃあ100%黒だって証拠は？」

と、負けずに反論をするも。

「確かにこれだけでは犯人だつて言えないけど、この人たちが100%白とも言えないでしょう？とりあえず、その人たちのことを教えてくれるかしら？」

と切り返し、雪ノ下が情報の提示を求めると、葉山は頭をボリボリ掻きながらため息をつき、三人の情報を提示するする。

「戸部は、俺と同じサッカー部だ。金髪で見た目は悪そうに見えるけど、一番ノリのいいムードメーカーだな、たまにやかましくて空気を読まない軽薄な部分もあるけど、文化祭とか体育祭とかでも積極的に

動いてくれる。少なくとも犯罪するような人間じゃないな」

「騒ぐだけしか能がないお調子者、ということね」

「………」

雪ノ下の一言に葉山は静かながらも憤りを覚えていた。

「?どうしたの?続けて」

急に黙り込んだ葉山に不思議そうな顔を向ける雪ノ下。

葉山は気づかれないようにガンを飛ばしながらも次の人物評に移る。

「大和はラグビー部。冷静で人の話をよく聞いてくれる。どんくさい所があるけどそこが人を安心させるっていうのかな。普通にいい奴だよ」

「反応が鈍いうえに優柔不断……と」

「……大岡は野球部だ。人懐っこくていつも誰かの味方をしてくれる気のいい性格だ。上下関係にも気を配って礼儀正しいし、いい奴だよ」

「人の顔色を窺う風見鶏、ね」

と、いい終えると葉山は机に手を叩きつけ、雪ノ下を睨み付ける。

「……雪ノ下さんは戸部が愉快犯みたく暴れまわったり、大和が犯行現場を目撃したのを黙っていたり、大岡が麻薬運んでたのを見たって訳?」

「いえ、そんなことないわ、少なくとも私の視点で彼らの事を調べただけだよ」

「あ……そう」

まあ、ここまで一方的に友人の事を糾弾されて黙ってる訳には行かない、すかさず船橋はフォローをする。

「うーんそれだともっと犯人じゃなくなると思うんだけど」

「どうゆうことかしら?」

「その推測が正しいとすると、戸部くんはそんな狡猾な事をするほどおつむは良くないし、鈍い大和くんはチェンメこの事なんて気づかないだろうし、あと他者の誹謗中傷を恐れている大岡君は、そんな自分で自分の首を絞めるような自殺行為は行わないと思うよ」

「まあ、そうと言えばそうだな……」

比企谷が呟くと周りは静かになる。

「うーん、ここまでだと解らないね?」

「少し調査してみる必要があるわね、比企谷君、葉山君、船橋君、由比ヶ浜さん、お願いできるかしら?」

と、雪ノ下は言い一旦打ち切ることになった。

「new page」

翌日、船橋達は調査に乗り出した。

比企谷は机に突っ伏しながら三人を観察、何かに気がついたようだ。

そして由比ヶ浜はと言うと、三人の関係を三浦、海老名に聞こうとするも三浦は「知るか!!」と怒鳴り付け、海老名は腐女子精神を暴走させ、收拾を付けなくしまっていた。

そして船橋は。

「……よし」

戸部の元へ向かっていた。

船橋の作戦はこうだ、物で釣る。

シンプルかもしれないが結構効果はある。

それに徹清もこう言っていた。

「英一、これで迷惑をかけた人に何かを買ってきてあげなさいその方が謝罪も円滑に進むからな」

といていた、気を引き閉めて向かっていると。

「?」

野球のグラウンドの外れたところに誰かが双眼鏡で野球部の練習試合を見ていた、制服が違うから少なくともうちの生徒じゃなさそうだ。

気になってみたので声を掛ける事にする。

「あのー」

「うわっ!?!」

声を掛けた途端、その人は驚く。

「はービックリさせないでください・・・」

「あ、ゴメン、所で君はなにやっているの?」

「あ、はい相手校の偵察に・・・」

「偵察?」

「そうです、ほら」

と言うと、その人は野球部についてのデータをまとめたノートを見せた。

「へー・・・すごい」

「こんな風に相手校のデータをとっているんです」

船橋は納得する。

「ごめんなさい、邪魔しちゃって」

「いいですよ、もう偵察はすんだので」

と、言うとその少年は荷物を持って去っていった。

「あ、そうだ! 戸部くんに会いに行かないと」

急いで戸部のもとへ向かうのであった。

[new page]

そして数日後、船橋達は奉仕部の部室に集まっていた。

「それじゃ由比ヶ浜さん、なにか分かったことはあるかしら?」

と訪ねるも。

「ゴメン! 無理だった!」

三浦に聞いても興味ないと返され、海老名の腐女子トークにヒイヒイ言っていた由比ヶ浜はなにも聞き出すことは出来なかった。

「そう、じゃあ比企谷君と船橋君は?」

「・・・少なくともお前と一緒に居るときはワイワイ騒いでいたな、分かりやすいくらい仲の良い奴等だと思ったよ」

「解りやすいは余計だけど、なかが良いのは間違いないな」

「じゃあ葉山、お前はお前がいなくなった後のあいつらを見たことがあるか?」

意外な一言に葉山は動揺する。

「どうゆう事だ？」

「要するにお前の友達三人組は、1人と1人と1人というわけだ。葉山は友達だけれど、他の奴は葉山と言う友達の友達。つまりお前を介してしか繋がってなかったということだ。事実、お前が先生に呼ばれたとかで席を立つと、途端に黙り込んでたぞ」

「あ、ああ。それすごいわかる……。会話回してる人がいなくなる」と何していいかわかんなくて、つい携帯とかいじっちゃうんだよね……」

由比ヶ浜が共感している隣では、葉山が苦々しい顔をしていた。

衝撃の事実が信じられないようだ。

「なるほど、じゃあこれもパチじゃないわけか……」

「何なの？」

船橋の発言に皆は視線を移す。

「いやさこの前、戸部くん和大和くん和大岡くんにちよつと聞き込み調査したんだけどさ、三人ともこんな事を言ってたんだよ」

「実はあの二人の事よく知らない」つてさ」

「なんだって!？」

「そうだったの!？」

由比ヶ浜と葉山は声を荒立てる。

「そうなんだよ」

と、船橋は以前の事を思い出していた。

「new page」

数日前、

船橋が偵察をしていた少年と別れた後、戸部と対面していた。

「ちよつと良いかな?」

「うわっ、船橋君……」

戸部は驚き、引いてしまう。

どうもこの前の一件から苦手に思われているようだ。

「えーつと……この前はごめんね、ちよつと、意識すつ飛んでたつて言うか……」

「あーいいいよいよ、気にしてないから……」

と、苦笑いしつつ答えた。

そして船橋は気を取り直して話を進めた。

「あのさ、今日の放課後空いてる?」

「空いてるけど」

「じゃあゲーセンに遊びに行かない?奢るからさ」

と言って、船橋は五千円札を取り出す。

「え!?こんなに!」

「うん良いよ、ガンガン使って」

「うおーっ!あざーすっ!!早速行こうべ!!」

と言うと船橋と戸部はゲーセンに向かった。

「うららららら!!」

「……」

シューティングゲーム、クレインゲームをハシゴしていく中、早速船橋はあの話をする事にした。

「あのさ、戸部くん」

「なんだべ?」

「大和くんとか大岡くんの事なんだけどさ、大和君はモテモテで、大岡君は野球で大活躍だつて知つてた?」

「え、そうだったの?」

意外な回答に船橋は困惑する。

「あれ？知らないの？いつも一緒に居るのに？」

「あー……………ぶっちゃけ言うとな、俺あの二人の事よく知らないんだわ」

「何で？」

「いや、何でかって言うと……あの二人自分から誘った訳じゃなくて隼人くんが紹介してきたからからなくだからその、興味ないっていうか……………」

「new page」

「とまあ、大和君も大岡君も同じような事を言ってたよ」

と、船橋の話を聞いて特に葉山は言葉を失う。

「うーん、三人ともお互いの事を知らないとなると悪口の書きようが無いと思うなー……………」

「……………確かに、その人の事を知らないようじゃ悪口なんて言えないわね」

「じゃあ、犯人は三人の中じゃなくて他の人間って事？」

「そうなるかな？」

そのやり取りを聞いた後、葉山は考え込んだ後。

「……………それじゃあ、犯人探しは難しいな」

「あら？諦めるの？」

「探しようがないだろ、ケータイ使っている人はたくさんいるんだから、いちいち探してたら何年かかると思う？」

雪ノ下は黙りこむ、確かに三人以外となってしまうとこれ以上の探索は難しいだろう。

すると比企谷が。

「ひとつだけ丸く納める方法があるぞ」

「え？何？」

「葉山。お前がこの三人の前で宣言しろ。『俺は他の人とグループを作る』と。結局はお前が誰とグループを組むか分からないから犯人は今回の行動に及んだんだ。お前がはつきりすればこんなふざけたメールは来なくなると思うぞ」

「……そうか。分かった。明日あいつらの前でそう言ってみるよ」

「その後どうなるかはお前次第だ。この三人の仲が悪くなったとしてもそこまでは関与しない」

「いや、充分だ。助かったよ。これをきっかけにあいつらの仲がより良いものになればいいからな」

「new page」

そして、下校しようとするとき比企谷と出会った。

「あれ？比企谷君？君も自転車なの？」

「お前、何でここにいるんだよ？」

「いや、僕も自転車通学だから……」

そして、このまま帰るのも難なので途中まで一緒に帰ることにした

「結局さ、チエーンメールの犯人って誰だったんだろうね？」

「知らねーよ興味ねーし」

「ははは……あれ？」

船橋はある少年を目にするあの人は確か偵察に来ていた人だ。

船橋は声を掛けようとする、その人はそそくさと去ってしまった。

「……行っちゃった」

「なんだ？知り合いか？」

「いや、知り合いじゃないけど、あの子以前この偵察していたんだよ」

「ふーん」

このときの僕は全然知らなかったんだ。

あの少年が、僕らの運命を、僕の知っている物語を大きく狂わせて
しまう元凶だったという事に。

第七話 惑いの慈悲

それは、日曜日に昼食を食べている時だった。

「おじいちゃん？」

「なんだ？」

「なんか元気なくなって思ったんだけど」

「……そうか」

「どうしたの？」

気になってみたので、詳しく聞くことにした。

「……わたしの立ち上げている組織の事を知っているな？」

少し船橋は何だっけ？と、思うもすぐに思い出す。

「あ、うん確か青少年の育成保護行ってるって言ってたっけ？」

「そうだ、貧困の影響でちゃんとした教育を受けることが出来ない人のための支援を行う一団だ」

と、言うと船橋は思い出す。

実は船橋徹一郎はある組織を立ち上げている。

それは、青少年健全教育保護協会、通称yos（ゆず）。

主な活動は教育の現状を、調査・研究し、家庭教育や地域における多様な学習活動の支援を図り、少年の健全な育成、生きる力を育むために様々な支援を行い、ボランティアも行う組織である。

「で、その組織で何があったの？」

「……OBの人が危篤状態だな」

「え!?本当に!？」

「その人の遺言状に、金銭的な問題で教育に困っている人が現れるまで遺産、お金はここに預けてほしいとかいてあったんだ」

「え?家族に残したりとかしないの？」

「あの人は独り身だ、国に回収されるくらいなら困ってる人の助けになりたいと、言ってたそうだ、お前の周りにそんな人はいないか？」

「うーん解らないな」

「そうか、もしそんな人にあったら話してみても私に連絡するように伝えてくれ」

「うん、解った」

そして職場見学から数日後、中間試験までもう少しとなり放課後となつて帰宅途中、ある少年が話しかけてきた。

「あ、あの！すいません！今いいつすか!？」

「え？何か用かな？」

突然話しかけられて、船橋は驚く。

「あ！すいません！俺の名前は川崎大志つす。」

「川崎……？川崎さんの……弟さん？」

「はいそうです！自分沙希姉ちゃんの弟です！こんなこと言うのもどうかと思うんですけど、姉ちゃんの事でちよつと悩み事があつて。それで、総武高校の制服は、学年ごとによつてリボンの色が違つて知つてたんで、総武高校の二年生の制服を着たみなさんに思い切つて相談に乗つてもらおうと思つたんす」

「そうだね……あつ」

船橋は比企谷たちがレストランで集まっているのを見かけた。

「ちよつと他の、クラスメートの方にも話してもらつても良いかな？」

「大丈夫つす！むしろ大歓迎つす!!」

「わかつた、ありがとうじゃあ行こつか」

といつて、レストランの中へ入つていった。

早速とあるレストランに入り、比企谷の元へ向かった。

「あれ？船橋君。おーい」

聞き覚えのある声があったので振り返って見てみると、そこには手を降る戸塚と教科書と睨めっこしている由比ヶ浜に優雅に茶を飲んでいる雪ノ下、そして比企谷がいた、そして雪ノ下も船橋の存在に気付いたようだ。

「あら、船橋君どうしたの？」

「実はね、川崎さんの弟の大志君が川崎さんのことで相談があるらしいんだ、ほら」

「あ、はい！自分弟の川崎大志です！」

「川崎……。もしかしてうちのクラスの川崎さんの弟さん？」
「たぶんそうっす。川崎沙希が俺の姉ちゃんの名前っす。確か二年F組だったはずっす」

「あー、あのいつも一人で教室の片隅で外を眺めている人だよね。さいちちゃんよく分かったね」

「うん。なんとなく似ていると思ったんだ」

「それで、その川崎さんの弟さんが私たちに何の用かしら？」

雪ノ下がそう尋ねると、大志は少し言いくそうに口を開いた。

「悩み事？川崎さんのこと？」

「はい。最近、姉ちゃんの帰りが遅くって。なんでもバイトしているみたいなんですけど、あまりにも帰りが遅いから心配になって聞いてみても『あんたには関係ない』って言われて相手にされなくて。前まで面倒見の良い、優しくて頼りになる姉ちゃんだったのに、急に冷たくなっちゃって、どうすればいいのかって……」

そう言うと、大志は顔を俯かせてしまう。

「でもさ、帰りが遅いって言っても何時くらいなん？あたしもわりと遅かったりするし。高校生ならおかしくないんじゃない？」

「あ、は、はあ、そうなんすけど。でも、五時過ぎとかなんすよ」
五時と言うと、もう起床している時間である。

「そこまで続くバイトと言うと、コンビニ、ではなさそうな可能性がある。」

「たしかに、だとすると最近遅刻してるのはそれが関係してるのかな？」

「そ、そんな時間に帰ってきて、ご両親は何も言わないの、かな？」

戸塚が心配そうに話しかける。

「そつすね。うちは両親共働きだし、下に弟と妹がいるんであんま姉ちゃんにはうるさく言わないんす。それに時間も時間なんで滅多に顔合わせないし……。まあ、子供も多いんで結構暮らし的にいっぱいはいなんすよね」

「家庭の事情、ね……。どこの家にもあるものね」

そう言った雪ノ下の顔は今までに見たことがないほどに陰鬱なものだった。その顔は悩みを話しに来た大志と同じように、否、それ以上に泣き出しそうだった。

「雪ノ下……」

比企谷が声をかけると、雪ノ下は気を取り直して大志に尋ねる。

「さすがに朝方まで総武高校の生徒が働いているのは見過ごせないわね。奉仕部として川崎さんを更生させましょう。それで、川崎さんが変わったのはいつごろからなのかしら」

「つい最近つす。ちようど新年度始まった頃つす」

「だとしたら、学年が上がったことに関係しているのかしら」

「さあな。さすがにこれだけじゃ情報が少なすぎる。おい大志。他に分かる事は無いのか？」

「そうつすね。あとは変な店から電話がかかってくるのか」

「変な店？どんな？」

由比ヶ浜が興味を引かれたように尋ねる。

「それが、エンジェルなんたらっていう店なんすよ。そこの店長から電話がかかってくるんす」

「そのどどこが変な店なの？」

「やばいつすよ！深夜にやっててエンジェルなんて名前が付く店なんて！」

「落ち着いて大志君、わからなくもないけど」

大志は必死になって言う。

「どっちみち、深夜に高校生が働くっていうのはまずいな。法律で禁止されてるんだから。となると、その店は川崎が高校生だということを知っていてこつそり働かせているのか。それとも、川崎の方がそれを隠しているのか」

「とにかく、これ以上は川崎さん本人に聞いて辞めさせるしかなさそうね」

「で、でも、どうすればいいのかな？だってどこで働いているのかも分からないし、働いているお店を辞めさせることができたとしても、また他のお店で働き始めたら意味無いよ？」

戸塚が核心を突いた事を言う。その通り。川崎にもなんらかの事情があつて朝方までバイトをしているのだろう。ならば、その根本的な問題の解決をしないと意味が無い。

「つまり、対症療法と根本治療、どちらも並行してやるしかないというわけね」

「そうだな。ちよつと待ってろ」

そう言つて俺はスマホを取り出す。

「何してるのヒッキー？」

「この近辺にある朝方まで営業している店で、『エンジェル』の名前が付く店を探してるんだよ。……………お、ヒットしたぞ」

「それで？」

雪ノ下が先を促す。

「あるのは二店舗だけだ。一つは『メイドカフェ・えんじえるてい』。もう一つは『エンジェル・ラダー 天使の階きざはし』」

「二つ目はメイドカフェだつて分かるけど、もう一つのお店は何のお店なの？」

戸塚も興味を引かれたように聞いてくる。

「こつちはバーだな。ホテルの最上階にある店みたいだ」

「川崎さんはどちらかの店で働いているとして、どちらから周ろうかしら」

「川崎が働いていそうな店から周ればいいだろう。大志。お前はどちらだと思う」

「この中で川崎のことを一番知っているのはこいつだ。ならばこいつに聞くのが一番だ。」

「そつすね。聞いたわけじゃないんですけど、姉ちゃん、メイドカフェなんてくだらないとか言いそうなんで、どっちかと言えばバーだと思っす。今思い返して見れば、電話をかけてきた店長の人も、話し方が落ち着いているというか、紳士的というか、そんな感じがしたんで」「なら決まりだな。明日とりあえずバーの方へ行ってみよう」

と比企谷は言い、一旦解散することになった。

(たしか川崎は塾のために金があるって言ってたよな、こつちじゃスカラシップで解決したけど……これは、ある意味博打かもな) じつはスカラシップ、つまり奨学金というのは簡単にとれるものではない、一定以上の成績を納めていないと貰えなかったり貰えたとしても打ち切られてしまうのだ。

(あ、そういえば……)

船橋は、先日厳一郎が言っていたことを思い出した。

そして、その日の晩御飯にて。

「親父、あの人の容態は？」

「……今週持つかわからないそうだ」

「そうか……」

徹清と厳一郎が会話を聞き、船橋は決心する。

「おじいちゃん、ちよつと良いかな？」

「なんだ？」

「この前言ってたことなんだけど……」

「!?、詳しく聞かせてくれるか？」

船橋は自分のクラスメートに恐らく無断で夜遅くまで働いてる人がいる事、明日自分達はその人のところへいくことを伝えた。

「……なるほど、確かにその人はただ事ではなさそうだな」

「確かお前の学校は、バイト原則禁止だろう？それにも関わらずやっているとなると不味いな」

徹清と厳一郎は厳しい顔つきになる、無断で、しかも夜遅くまでやっているとなると、校則どころではなく、労働基準法違反になり、悪ければ退学ものだろう。

「わかった、明日その川崎さんにこの話をしてみてくれ、返事が聞きたい、受けるのであればここに連絡するように伝えてくれ」

と、いうと厳一郎は名刺を出した。

「わかった。あと父さん、そこに行くからその、スーツ用意できないかな？」

「サイズが合うか解らないが・・・」

そして次の日、船橋達は集まっていた。

「おまたせ」

待ち合わせ場所に集合すると、比企谷と雪ノ下と由比ヶ浜はそれぞれ服装の良し悪しを早速聞いていた。比企谷は船橋と同じスーツ姿、雪ノ下は白いサマードレスに黒いレギンス、由比ヶ浜は上にはデニム生地の手ぬぐいの短いジャケットを羽織り、下は黒いチノに金ボタンが押し付けられたホットパンツ。

「まあ、スーツならそこまで言われなくてもいいでしょう。けれど、由比ヶ浜さんは厳しいかもね」

「え？だめなの？」

「ええ。女性の場合、そこまで小うるさくはないけど……」

そう言つて雪ノ下は由比ヶ浜の服装を上から下まで目を通す。

「しようがないわね。私がコーディネートしてあげる。私の家に来なさい」

「え、ゆきのんの家、行けるの!?行く行く!……あ、でもこんな時間に迷惑じゃない?」

「気にしなくてもいいわ。私、一人暮らしだから」

「この子、できる女だ!」

由比ヶ浜が大袈裟に驚く。なんだその基準は。一人暮らししている女性は全員できる女なのかよ。

「じゃあ行きましょうか。すぐそこだから」

そして数十分後、雪ノ下と由比ヶ浜が再びやって来た。雪ノ下は先ほどと打って変わって漆黒のドレス、由比ヶ浜は深紅のドレスを着ていた。

「さあ、行きましょう」

雪ノ下が先導し、船橋たちは目的地のバーにたどり着く。扉を開くとそこは異質な空間だった。明かりは優しく穏やかで、どこか薄暗い

とも感じる。きらびやかではなく、落ち着いた雰囲気。

「ね、ねえ、あたしたち場違いなんじゃない?」

バーの空気に圧倒されたのか、由比ヶ浜は怖気づいている。

「まあまあ、落ち着いて」

「なんでヒツキーとふなっしーはそんなに自然としてるの?」

「いや、だってここまで来て帰るわけにもいかないだろう。だったらもうなるようになれだ」

「僕はまあ、家族（主に父さんとおじいちゃん）に比べれば怖くはないって言うか・・・」

事実、先日のテニススコートの騒ぎの後の鬼のような説教の方が怖かった、父と祖父には失礼だが。

「いや、これより怖い家族ってなんなの?」

「由比ヶ浜さん、あまりキョロキョロしていると怪しまれるから、ごくごく普通にしてちょうだい」

「その普通が難しいよ……」

嘆く由比ヶ浜を連れて船橋と比企谷と雪ノ下は奥へと進む。

「あ、あれ川崎さんじゃない?」

少し進んだところで、由比ヶ浜がカウンターに立つ女性バーテンダーを指す。すらりと背が高く、顔立ちは整っていて、泣きほくろが印象的だった。

「あれが川崎か」

「うん……。ってヒツキーも同じクラスじゃん!」

「しっ、声でかい」

「とりあえず行きましょう」

雪ノ下が先陣を切ってカウンター席に座る。

「捜したわ。川崎沙希さん」

「雪ノ下……」

雪ノ下が話しかけると、川崎の顔色が変わる。その表情は親の仇でも見るかのようなもので、はつきりとした敵意が込められている。

「こんばんは」

川崎の気持ちを知ってか知らずか、雪ノ下は涼しい顔で挨拶する。

「ど、どもー……」

雪ノ下に続いて由比ヶ浜も挨拶するが、川崎の表情を見て日和った挨拶をする。

「由比ヶ浜か……、一瞬わからなかったよ。あんたはこの前越して来た船橋で、となりのあんたも総武高校の人？」

「あ、うん。同じクラスのヒツキー。比企谷八幡」

俺が会釈すると、川崎はふつとどこか諦めたように笑う。

「そっか、ばれちゃったか」

川崎は別段隠すわけでも慌てるわけでもなく肩をすくめて見せた。浅いため息について壁にもたれかかる。

「……何か飲む？」

「私はペリエを」

「え？じゃ、じゃああたしも同じのをっ!？」

「ジンジャーエール」

「ウーロン茶で」

船橋たちのオーダーを受け、川崎が慣れた手つきで用意し、カウンターに置く。

お互い、なんの合図も無くそれぞれ口をつける。

「それで、何しに来たのさ？4人でデートってわけでもないんでしょ？」

「そんなはずないでしょう。あなたがここで働いているかもしれないと思って様子を見に来たのよ」

雪ノ下がそう告げると、川崎の顔が強張った。

「だったら何？私を説得してやめさせるつもり？そんなことでやめると思ってたんの？」

川崎が俺たちを睨み付ける。由比ヶ浜はさの眼光におびえるが、比企谷と雪ノ下はその程度でビビるわけがない。

船橋は最初こそ驚いたが、あの話をするために怖じ気づく訳には行かないとすぐに気を取り直した。

「今日、お前の弟が俺たちに相談しに来たんだよ。最近、お前の帰りが遅くて心配だけど話も聞いてくれない、って嘆いていたぞ」

「そう、大志が。なら、あたしから大志につとくから気にしないでいいよ。……だから、もう大志と関わらないでね」

しかし、それでも雪ノ下はひっこまない。

「止める理由ならあるわ」

雪ノ下は川崎から左手の腕時計へと視線を動かして時間を確認する。

「十時四十分……。シンデレラならあと一時間ちよつと猶予があったけれど、あなたの魔法はここで解けたみたいね」

「魔法が解けたなら、あとはハッピーエンドが待つてるだけなんじゃないの?」

「それはどうかしら、人魚姫さん。あなたに待ち構えているのはバツトエンドだと思っただけ」

「……ねえ、ヒツキー、ふなっしー。あの二人何言ってるの?」

二人の皮肉の掛け合いに、由比ヶ浜が疑問を投げかける。比企谷は一応察したようだが船橋は率直に問いかける。

「二人とも、わざわざ遠回しに話さなくっても、お互い意味分かってるんじゃないかな?」

と、船橋が呟くと二人は睨み付ける、二人が言っているのは十八歳未満は深夜十時から早朝五時までには働いてはいけないという、労働基準法のことだ。だが、今はそれを由比ヶ浜に説明してやる時ではない。

「辞める気はないの?」

「ん?ないよ。……まあ、ここは辞めるにしてもまた他のところで働けばいいし」

「とにかく切羽詰まってるんだね」

川崎はしれつとなんでもないことのように言った。その反応に雪ノ下が苛立った様子を見せ、船橋は核心を突いた呆れたような返答をすると、川崎の瞳はますます鋭くなった。

ピリピリした険悪な空気の中、恐々と由比ヶ浜が口を開いた。

「あ、あのさ……川崎さん、なんでここでバイトしてんの?あ、やー、あたしもほら、お金ないときバイトするけど、年誤魔化してま

で夜働かないし……」

「別に……。お金が必要なだけけど」

ことり、と小さな音を立てて酒瓶が置かれる。

「あんたらにはわからないよ。別に遊ぶ金欲しさに働いてるわけじゃない。そこらのバカと一緒にしないで」

船橋たちを睨み付ける川崎の目には力があつた。邪魔をするなど、そう力強く吠える瞳。だが、その中には若干の潤みがあつた、分かつて欲しいけどプライドゆえか、他者に対して攻撃的になつて距離を取らせ、分からせないようにしている。他者に自分を分かつてもらう、それは自分の弱さをさらけ出すことに等しい。それが嫌だから。だから弟にもきつく当たつたのだろう。『あんたには関係ない』と。姉である自分が弟に弱みを見せてはならないと。

そんなもの、本当の意味で社会人になつたとしたら糞同然になるのだが。

「やー、でもさ、話してみないとわからないことってあるじゃない？もしかしたら、何か力になれることもあるかもしれない……。話すだけで楽になれること、も……」

由比ヶ浜の声は途中から途切れ途切れになる。それはある意味火災現場にガソリンを放り込むようなものだ。そのような、いかにも心配しているかのような台詞は悪手だ。中途半端に分かつた気になつ

て相談に乗ると言われたところで、反感を買うのは明らかだ。おまけに具体的な解決策も無しに言った結果、打つ手無しとなれば無責任にもほどがあるということになり、神経を逆撫でするようなものだ。由比ヶ浜のことだから、とりあえず力になろうと思っただけで、具体的なことはなにも考えていないのだろう。

「言ったところであんたたちには絶対わかんないよ。力になる？ 楽になるかも？ そう、それじゃ、あんた、あたしのためにお金用意できるんだ。うちの親が用意できないものをあんたたちが肩代わりしてくれるんだ？」

「そ、それは……」

俺の予想通り、川崎は苛立った様子で由比ヶ浜を問い詰める。

「そのあたりでやめなさい。これいじょう吠えるなら……」

雪ノ下が凍えるような声で言った。途中で言葉を切ったせいでもり恐ろしさが増す。何する気だよこいつ。

そんな雪ノ下に川崎も一瞬たじろいだだが、小さく舌打ちをすると雪ノ下に向き直った。

「ねえ、あんたの父親さ、県議会議員なんですよ？ そんな余裕がある奴にあたしのこと、わかるはず、ないじゃん……」

静かに、囁くような口調。それは何かを諦めた声だった。

「ふ——————」

「「？」」

その状況を見て船橋はため息を突いた、周りの事で呆れたのもあるが、これはこの話をするために腹を括ると覚悟するためのものだった。

た。

「

「な、何なのよ？」

「船橋君、言いたいことがあるならばつきりと言いなさい」

「うん、はつきりと話すよ」

突然のため息に川崎は戸惑いつつも不快感をだし、雪ノ下は忌々しい目で睨み付ける。

無論船橋はそんなことを気に止めることなく釈然とした態度で望んだ。

「まず雪ノ下さん、さつきから聞いているんだけど、君は川崎さんをどうしたいんだい？」

「何言っているの？決まってるでしょう？更正を」

「僕には、川崎さんの気持ちを蔑ろにして自分の意見を押し付けてる気がするんだけど」

その発言に雪ノ下は憤った表情をして対する川崎は驚きつつもほっとした表情になる。雪ノ下の意見は確かに正しい、法律に元付く公正な物だ。

しかしそれにはあるものが欠けていた、それは他人の思考だ。

先ほど川崎はあんたに自分の気持ちが解らないと言っていた。

実際当たってしまったって、雪ノ下がこのような意見を言えるのは性格の他に環境にも関係があるからだ、さつきも言っていたように雪ノ下の父は県議で比較的裕福な所にいる、故に川崎のような環境を知らないでいてしまったため、あのような意見を出せた。

けどそれはあまり裕福では無い、川崎から見れば金持ちのエゴと捕らえられてしまったのだ。

「雪ノ下さんは川崎さんがどのように暮らしているのか解る？」

「それは……」

「解っているのならあんな事は言えないと思うけど」

「……解ってんじゃない、だったら」

「けどね」

船橋の発言に川崎は安心し、どうにかしようとするも、遮られる。

「川崎さん、君は現実を見ていると思ってるけど、僕には変な所で意固地になって意味なく自分を追い詰めてる頭のおかしい人にしか思えないよ」

船橋の発言に川崎は憤り、それ以外の三人、特に由比ヶ浜はぎよつとした表情で船橋に視線を向ける。

「何あんた？喧嘩売ってるつもり？」

「じゃあ聞くけど、これが露見してしまったら周りに、特に家族はどうなるかな？」

「……関係ないっていつてるでしょ」

「少なくとも変な意地のせいで大勢の人たちが迷惑かかると思うけど」

「つつ……」

「それに、現実を見ているのだとしたらそもそもこんな事はしないはずだし、そして行ったらどうゆう事になる事も」

言いかけたその瞬間、川崎は怒った表情でテーブルを叩きつける。

「……あんたは、分かってくれると思ってた私かバカだった」

そして川崎は憤りながらも悲しそうな口調で会話をする。

「結局あんたもそうなんだ、なんにも知らないで、知った被ったふりして、一方的に押し付けて、邪魔して！」

「……」

川崎の表情はさつきとは違って激情的だった、しかしそれでも船橋は驚かずに川崎を見つめる。

「何様のつもり？なんにもできない癖に、何も知らないくせに、あたしのためにお金用意できないくせに。うちの親が用意できないものをあんたたちが肩代わりできないくせに!!」

話しているうちに川崎の口調は涙ぐんだものになっていた、自分がどれだけ惨めか、不甲斐ないか、矮小であるかを突き付けられてしまっているためだ。

「僕は」

「何？」

「僕は君の気持ちを知っていて、この状況を打開できるからこんな事

を言っているんだけど」

「何を言っているの?」

と川崎は問い詰めてくると船橋は名刺を出す。

「青少年健全教育保護協会代表、船橋巖一郎……ってまさか!」

「僕のお爺ちゃんだ」

「何ですって!」

突然の回答に、川崎と雪ノ下は驚く。

「そこに電話をすれば君の問題は解決すると思うよ」

「何ですよ……」

「……じつはそこでOBの人の遺産を支援金として受け取ってくれる人を探しているんだ、そしてこれがその支援金の額。まあ三億円ぐらいあれば大丈夫だよな?」

そういうと船橋はメモ用紙を取りだし川崎に見せた、すると川崎は驚いた。

「こ、こんな大金受け取れるわけ……」

「そのOBの人は受け取ってくれる事を望んでいるらしいよ、残す宛もないから金銭的に困ってる人のために使って欲しいって」

と、船橋は淡々とした口調で話していると雪ノ下は反論する。

「船橋くん、あなたは!」

「言いたいことは分かっている、あとで聞くから今は黙っていてくれ」

と、言われると雪ノ下は素直に黙った。

「川崎さん、確かにこんな大金をハイ、アリガトーって受けとるのは不謹慎なのは解っている、けどよく考えてほしい、君の状況を」

仮にここを辞めたとして他に行っただとしてもいずればボロがでてばれてしまう、そしたら君は退学になるどころか一生消えない烙印を付ける事になる、そしたら必ず家族に迷惑が掛かる、罰金を払うはめになったりとかね」

船橋は立て続けに会話をする、対する川崎の顔は見たことのない表情をしていた、強いて言うなら驚愕、困惑、葛藤、不信といった気持ちをごちゃごちゃにしたかのようなそんな顔をしていた。

「あと、こんなことを言うのは卑怯だけど、これを言わないと川崎さん

は折れないからな」

「・・・何・・・?」

川崎は恐る恐る、聞こうとする。

船橋も一瞬戸惑うも覚悟を決めて話す。

「君はこのOBの人の心からの慈悲と願いを、裏切って意地張って生きるつもりかい?」

その言葉は、短くではあったが川崎の心にのし掛かり、惑わせた。

(君はこのOBの人の心からの慈悲と願いを、裏切って意地張って生きるつもりかい?)

こんな大金は受け取れない、と以前は思っていたがこれを聞いたあと直後様々な記憶がフラッシュバックされ嵐のように駆け巡った。

今日、お前の弟が俺たちに相談しに来たんだよ。最近、お前の帰りが遅くて心配だけど話も聞いてくれない、って嘆いていたぞ

僕には、川崎さんの気持ちを蔑ろにして自分の意見を押し付けてる

気がするんだけど。

君は現実を見ていると思ってるけど、僕には変な所で意固地になって意味なく自分を追い詰めてるとしか思えないよ

少なくとも変な意地のせいで大勢の人たちが迷惑かかると思うけど

川崎さん、確かにこんな大金をハイ、アリガトーって受けとるのは不謹慎なのは解っている、けどよく考えてほしい、君の状況を

仮にここを辞めたとして他に行ったとしてもいずればボロがでてばれてしまう、そしたら君は退学になるどころか一生消えない烙印を付ける事になる、そしたら必ず家族に迷惑が掛かる、罰金を払うはめになったりとかね。

キミハコノOBノココロカラノジヒトネガイヲウラギツテ、イジヲハツテイキルツモリカイ？

それによつて川崎はますます惑う、受け取つてしまつたら録な事にならないうちかもしれない、甘えてしまふかもしれない。

しかし受け取らなければ、問題は解決しない、家族に迷惑をかける、人生が台無しになる、

この人の気持ちを裏切つた事を一生抱えたまま生きる羽目になるかもしれない。

と思つていたその時だつた

「!？」

船橋は土下座をしたのだ。

「な、何やっているの!?!やめてよ!？」

川崎は声を荒げるも、船橋は話す。

「川崎さんの気持ちは分かつてるよ、正直これはエゴなんだ、川崎さんとOB両方救いたいつて言う。けどそれでも僕は川崎さんをこれ救いたい、だから、お願いします」

船橋の懇願に周りのみんなは驚く、そして川崎は考え込んだあと、腹を括るかのように、深呼吸をし。

「……ちよつと考えさせて、いきなり言われても困るから……」
「うん分かつた、けどなるべく早めにお願ひね、その人は長くないから、あとこれお代ね、お釣り入らないから」

そして、店を出てエレベーターに乗つたあとでも奉仕部のみんなは黙つていた。

雪ノ下は睨み付け、由比ヶ浜はなにか言いたくても周りに押されて言えず、比企谷は顔をうつむいて、考え込んでいた。

そしてロビーに戻ると、雪ノ下が話しかけてきた。

「船橋君、ちよつと待っていてくれるかしら」

「うん、分かってる」

「比企谷君、由比ヶ浜さんをお願いできるかしら？」

「・・・わかった、俺も後で来て良いか？」

「構わないわ」

と言うと、比企谷は由比ヶ浜を連れ、どこかへ向かった。

そして雪ノ下は船橋を問い詰めた。

「あなた、さっきの行動は何なの？」

「・・・」

「あれはもう奉仕部の理念に反しているわ」

「飢えた人間に魚の取り方を教える、だっけ？」

「そうよ、あれじゃだ彼女は自立できなくなってしまう。彼女の問題は、彼女とご家族で解決するべき問題なのよ。他人が解消するべきじゃないわ」

「解決するために川崎さんは働いてたんじゃないかな？」

「!!」

「・・・ごめん、こんなことを言うのもなんだけど、こうじゃないと更正はできないと思う、ていうか元々まともだからあんな事をしていたんじゃないかな？」

船橋は申し訳無いと思いつつも語る。

「じゃあ、僕は帰るから・・・」

というと、船橋は帰っていった。

「なあ、雪ノ下」

さっき由比ヶ浜を連れ出した比企谷が話しかけてきた。

「・・・何かしら」

「別にあいつの肩を持つ訳じゃ無いけどさ、これで良かったんじや

ねーの？」

比企谷の発言に雪ノ下は憤る。

「あなたまで何を言っているの!？」

「確かに俺も一瞬引いたけど、結果的に川崎はどうかになつたわけだし、万々歳じゃねーの?」

「っ!それでも!!」

「辞めさせた後どうするんだよ?金用意できんのかよ?」

と、言われ雪ノ下は口を閉じてしまう。

「まあ、スカラシップを取らせようと思つたけど、あれリスクが高いからな」

こうして、問題は甘めに採点付けて解決したのであった。

そして翌日、川崎は船橋の元へ来ていた。

先日の答えを聞くためだ。

「じゃあ返事を聞こうか?」

「………借りるってことにして」

川崎の返事に船橋は困惑する。

「借りる?」

「あの後家族に全部打ち明けた、そしたら「ただ貰うだけじゃ自分のためにならないからそのお金の事をちゃんと考えるようにしなさい」って言われたから」

船橋は察する、そのお金を借りたものと認知して絶対に甘受しないようにするつもりなのだろう。

「わかった」

「あと、そのOBの人、どうなった？」

「……先日、ご臨終したよ」

「そう……墓の場所って解る？」

「後で聞いてみるよ、一緒に来るかい？」

「うん、行く」

と、いうと川崎は去っていった後、船橋は考えていた。

(これは、仕方のないことなんだ)

と、思うと船橋は前世の記憶を思い出す。

(いいのですか!?こんな事をして!?)

(私は別に法律に触れることはしていませんが)

(しかしいくらなんでも、その、どうかと)

(仕方のない事です)

「・・・行くか」

と静かに呟くと、船橋は教室に戻った。